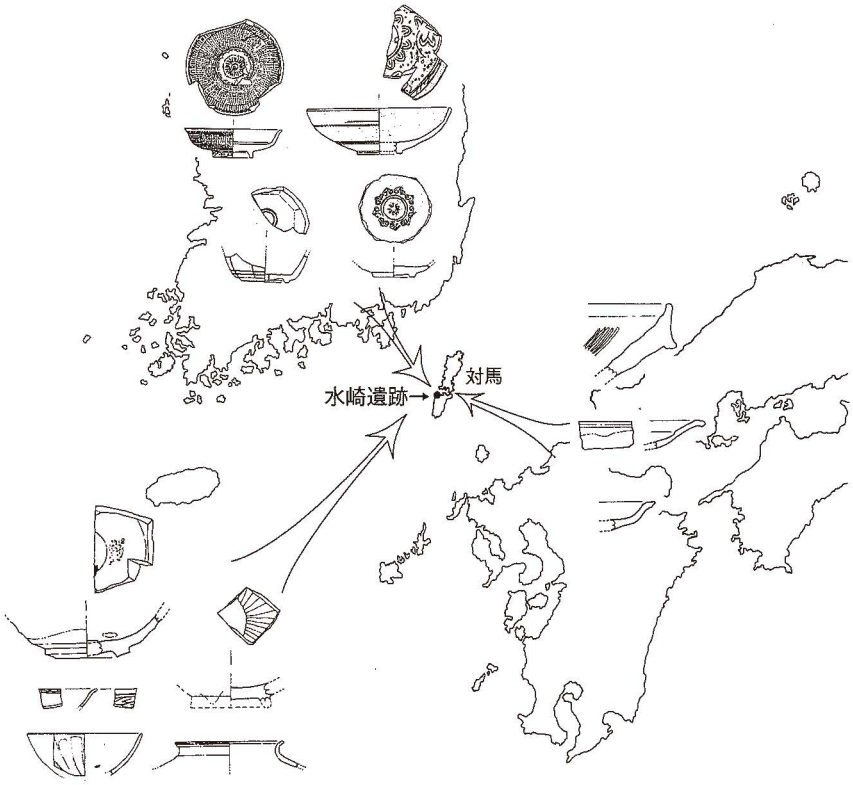
美津島町文化財調査報告書　第８集

水崎（みずさき）遺跡

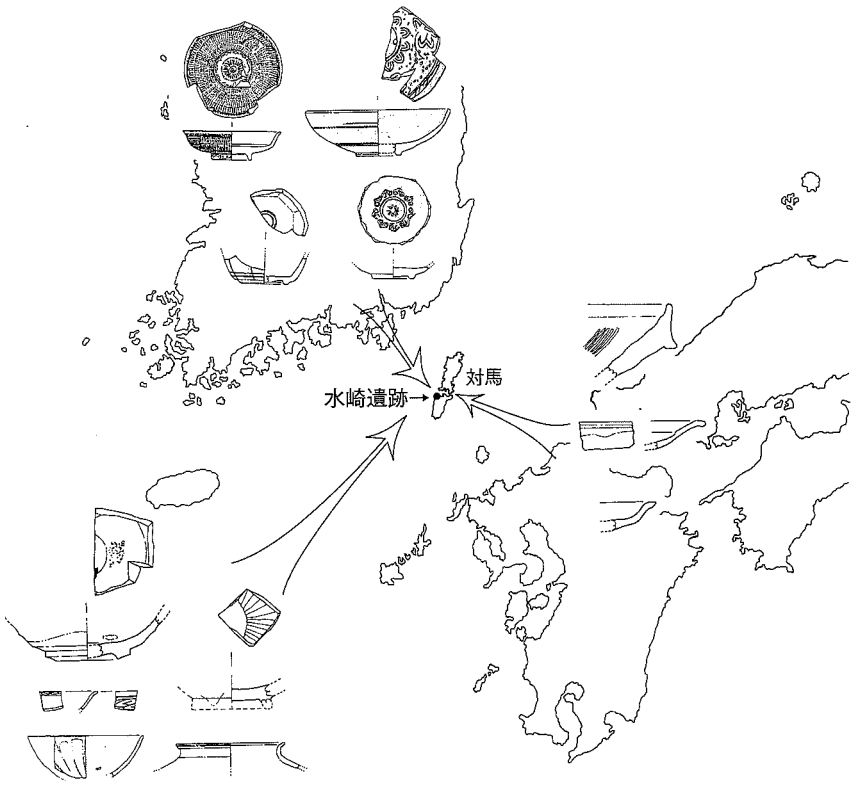


1999

長崎県美津島町教育委員会

美津島町文化財調査報告書　第８集

水崎遺跡
（みずさき）



東南アジア産の遺物

朝鮮王朝陶磁

発刊にあたって

美津島町には，壱岐・対馬国定公園の中心的景勝地・浅茅湾があり，その多くは岬や島々によって形成されています。古代より大陸交通の要衝として栄え，近代には軍事上の要地となった本町は，特別史跡金田城をはじめ貴重な文化財が多く残されています。今回の発掘調査は，町の団体営農道整備事業に伴って実施したものですが，その結果12世紀～16世紀のものと見られる中国・朝鮮半島系の陶磁器類が多く出土しました。発掘調査場所は美津島町尾崎に位置する水崎遺跡で『海東諸国記』によると尾崎浦は，中世の倭寇の本拠地として700余の戸数があると記されており，当時の対馬ではかなり大きな集落であり，周辺にも同時期と見られる遺跡が存在し往事の繁栄を偲ばせることができます。

歴史をひも解くと，応永26年（1419）６月，朝鮮半島より倭寇討伐のため１万７千余の大軍が対馬に来襲し，真っ先に尾崎浦が襲撃されており（応永の外寇），この地が歴史的に重要性を帯びていたことが推察されます。したがって，今回報告書が刊行できることは，貴重な郷土の歴史を知る上で大変意義深いことであります。

調査にあたっては，ご理解・ご協力を頂いた地元関係者の皆様，並びに，ご指導を賜りました県文化課，藤田和裕埋蔵文化財班係長（副参事），福田一志文化財保護主事には深く感謝申し上げます。

全国的に埋蔵文化財に対する関心が高まるなか，この報告書が学術資料として，また文化財愛護の一助となれば幸いに存じます。

平成11年３月31日

美津島町教育委員会教育長　川　本　初　實

例　　言

1．本書は，長崎県下県郡美津島町大字尾崎字仮宿に所在する水崎遺跡の調査報告書である。

2．調査主体は美津島町教育委員会が，調査は美津島町教育委員会と長崎県文化課が実施した。

3．調査は，範囲確認調査を平成８年３月10日～３月14日，本調査を平成９年11月10日～11月14日まで実施した。

4．調査関係者は次のとおりである。

美津島町教委宇委員会	教育長	川本　初實
（調査担当）	生涯学習係長	福井　順一
〃	副参事	大浦日奈子
〃	主事	田中　淳也
長崎県文化課		
（範囲確認調査）	埋蔵文化財班係長	藤田　和裕
（本調査）	文化財保護主事	福田　一志

5．本書の遺物写真については，長崎県文化課文化財保護主事宇土靖之の協力を得た。

6．本書の執筆については田中，福田が分担執筆した。なお，東南アジア産陶磁については長崎県文化課文化財保護主事川口洋平が執筆した。各項の末尾に執筆者名を記した。

7．本書の編集は福田による。

本 文 目 次

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境
・地理的環境……1
・歴史的環境……1
第Ⅱ章　調査の経緯
1，調査の経緯……4
2，土　　層……5
3，遺　　構……6
第Ⅲ章　出土遺物
1，遺構出土の遺物……7
2，3・4層出土の遺物……8
・中国陶磁器……8
・朝鮮王朝陶磁器……8
・国産陶器，滑石製石鍋，土錘……11
3，その他の遺物……11
4，東南アジア産の遺物……14
5，国産の遺物……17
第Ⅳ章　ま と め
水崎遺跡の歴史的背景……21
早田氏と海外貿易……22
陶磁器破片数量からみた水崎遺跡……23
水崎遺跡の性格について……25

挿 図 目 次

第1図　対馬における水崎遺跡位置図……1
第2図　水崎遺跡周辺図……2
第3図　グリッド配置図（1/600）……4
第4図　Ⅱ区3層の遺物出土状況と土層図……5
第5図　Ⅰ～Ⅲ区ピット検出状況……6
第6図　Ⅰ・Ⅱピット実測図……6

第７図　ピット出土の遺物……7
第８図　II区，３・４層出土の遺物……9
第９図　II区，３・４層出土の遺物……10
第10図　その他の出土遺物……12
第11図　その他の出土遺物……13
第12図　東南アジア産の陶磁器……15
第13図　国産の遺物……16
第14図　尾崎地区字図……21

表　目　次

表１　出土陶磁器観察表……19
表２　出土陶磁器観察表……20
表３　尾崎地区字名……21
表４　破片数定量分析表……24
表５　関連年表……27

図 版 目 次

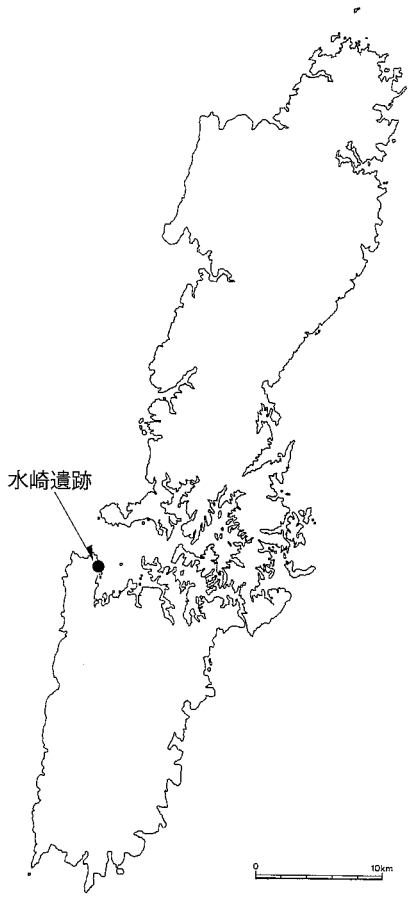
図１　遺跡遠景及び土層……31
図２　II・III区ピット検出状況……32
図３　焼土検出状況……33
図４　白磁D類出土状況……34
図５　朝鮮王朝陶磁……35
図６　中国産磁器・朝鮮王朝陶磁……36
図７　朝鮮王朝陶磁・他……37
図８　東南アジア産の遺物（外面）……38
図９　東南アジア産の遺物（内面）……39
図10　国産の遺物（外面）……40
図11　国産の遺物（内面）……41

第Ⅰ章　地理的・歴史的環境

・地理的環境

対馬は南北82km，東西18kmを計り，九州本土と朝鮮半島の間に位置する。佐渡857km²，奄美大島819km²に次いで３番目に大きく，708km²の面積がある。東は対馬海峡，西は朝鮮海峡に挟まれた海岸は沈降と隆起によって形成されたリアス式海岸が連なり，総延長915kmにもなる。総面積の約90％は山林で覆われ，耕地面積は総面積の2.3％（約1.597ha）と狭小である。ちなみに壱岐島は4.450haであり，面積は対馬の５分の１に対し，2.8倍の耕地を有しており両島の相違が窺える。地勢は島全体を急峻な深い山が連なり，標高200m～300mの山々が海岸まで迫り，地理的特殊性により対馬特有の生物や大陸系の生物が数多く生息する。

美津島町は対馬の中央部にあり，浅茅湾の内海の東部から南西部にかけての一帯に位置し，東西20km，南北27.8kmを計り面積は119.98km²である。北は浅茅湾を挟んで一部が豊玉町，南は厳原町に接する。本町の海岸線は総延長275kmで日本一長く，しかも湾入突出部が多く天然の良港が随所にある。また海岸まで山裾が伸び断崖となっているところが多く，リアス式海岸の特徴が顕著に表れ，特有の自然景観を四季折々に繰り広げている。地勢は白岳（515.3m）を主峰とする400m級の山々が連なる南部山地と，島内で最も低い浅茅湾周辺からすると，南高北低の様相を呈している。耕地面積は185haしかなく，大半は狭小な谷間の入り江を埋め立てた干拓地である。人口は昭和45年を契機に年々下降気味で，現在8,770人，2,937世帯（平成11年２月）であるが，減少率では島内で最も少ない。



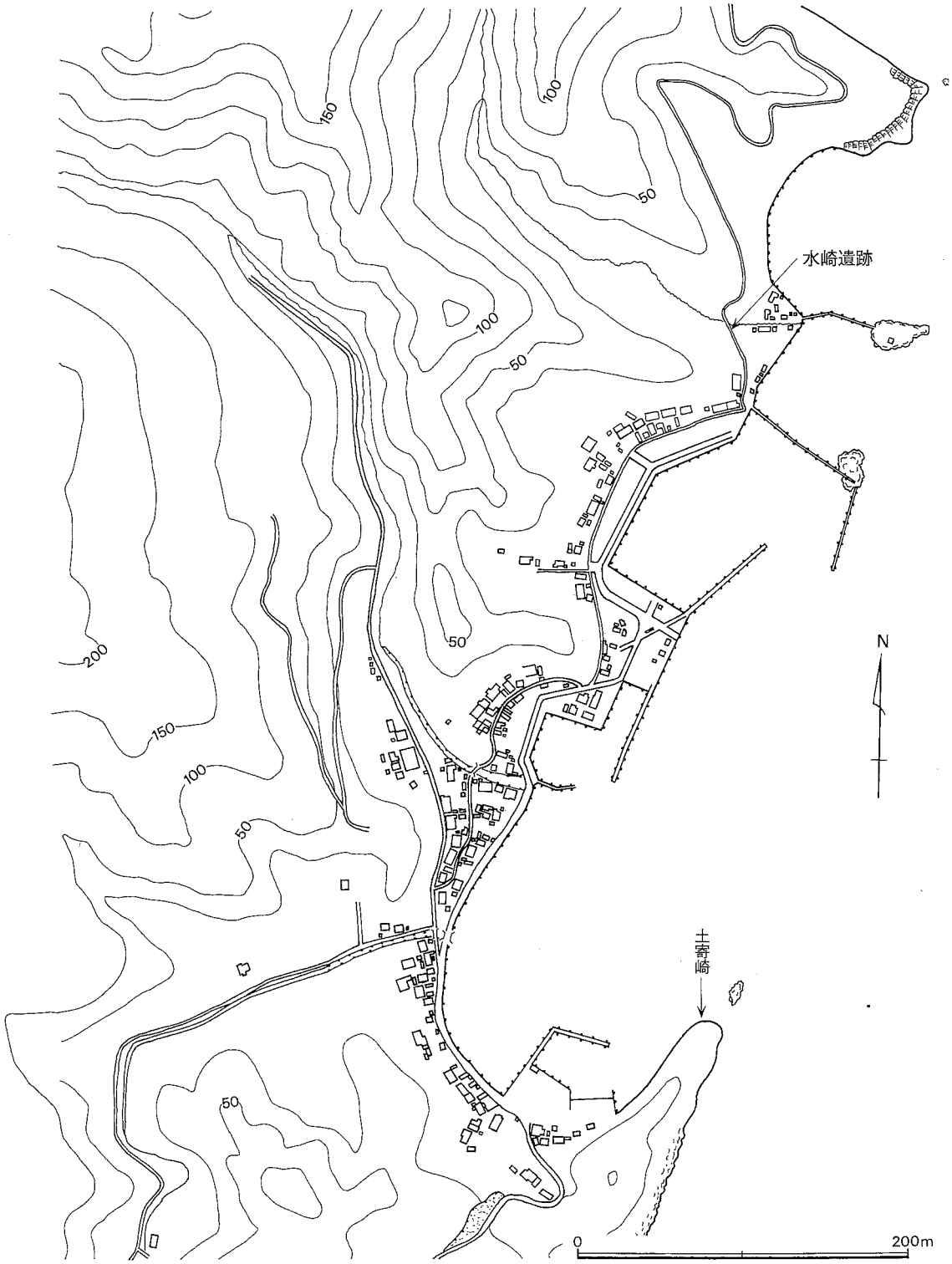
第１図　対馬島における水崎遺跡位置図

本遺跡は美津島町の西部，外浅茅に臨み西は朝鮮半島に面する浅茅湾の入り口に位置する。奥深い浅茅湾の開口部にあたることから，中世より海外交通の根拠地として機能していたものと考えられる。水崎遺跡は現在そのほとんどが畑地であり，一年を通じて北西風の風が止むことはなく作物はあまり育たない。ただし，対馬の中では平地に恵まれていると言えよう。

・歴史的環境

対馬には周知されている遺跡がおよそ320あり，そのうち美津島町には113の遺跡が存在する。これは島全体の約35％にあたり，その多くは耕地の少ない浅茅湾・三浦湾周辺に所在する。遺跡の殆どが弥生時代，古墳時代の箱式石棺で，その多くは原形を留めていない。また，現在も美津島町の中心である鶏知には島内唯一の高塚墳が群集する根曽古墳群があり，古代における対馬の中枢がこの辺りにあったことは疑いない。また，浅茅湾の南辺に城山と言われる峻険な岩山があり，この約２km四方の半島全体に朝鮮式山城の遺構がある。『日本書紀』によれば667

年（天智６）に「是ノ月ニ，倭国ノ高安城，讃岐国山田郡ノ屋嶋城，対馬国ノ金田城ヲ築ク。」とあり，当時国防の最前線基地として防人が常駐していたことが偲ばれる。金田城は，総延長約5.4kmに及ぶ石墨や，城戸跡が現在も残存しており，その頂上に立てば遠くは朝鮮半島が眺望できる。金田城は、平成５年度より本格的な発掘調査が開始され，その全貌があきらかにされる日もそう遠くない。昭和57年３月23日に国の特別史跡に指定されている。



第２図　水崎遺跡周辺図

今回報告の水崎遺跡は，浅茅湾の湾口を占める要津である美津島町尾崎にある。『海東諸国記』によればこの尾崎地区周辺には「頭知洞浦200余戸」，「敏沙貝浦200余戸」，「可里他徒浦200余戸」，「阿吾頭羅可知浦100余戸」，「阿吾沙只浦」とあり，それぞれ順に土寄崎・水崎・仮宿・大連河内・郷崎に比定されている。このうち水崎については，豊玉町と美津島町の２箇所に存在する。浅茅湾の開口部に軌しくも南北に水崎の地名が存在することは，水崎が本来水先の意であったことが予想される。朝鮮半島では13世紀以来倭寇の横行に悩まされ，多大な被害をうけており1419年（応永26）対馬が倭寇の最大の基地とみなされ，李従茂率いる朝鮮の軍船220余船，軍兵１万７千２百余の軍勢が来襲し，まず尾崎浦に攻め入り船を奪い，家を焼き払い次々と集落を襲撃しており，尾崎地区が甚大な被害を被ったことが知られる。尾崎地区をまず占拠した朝鮮軍は，小船越をも占拠したが，島主宗貞盛が暴風雨の到来を警告したため，朝鮮半島へ引き上げている。この後，一時朝鮮半島との交易が途絶えるなど応永の外寇（己亥東征）が内外に及ぼした影響は計り知れないものがある。また，今回の調査対象地である水崎遺跡もこの事件に巻き込まれたことは想像に難くない。この他遺跡周辺には中世の遺跡がいくつか存在する。大連河内遺跡・尾崎前原遺跡，亥ノ浜遺跡は本遺跡同様の遺跡と考えられ，『海東諸国紀』の村々の一つを構成する遺跡であろう。（田中）

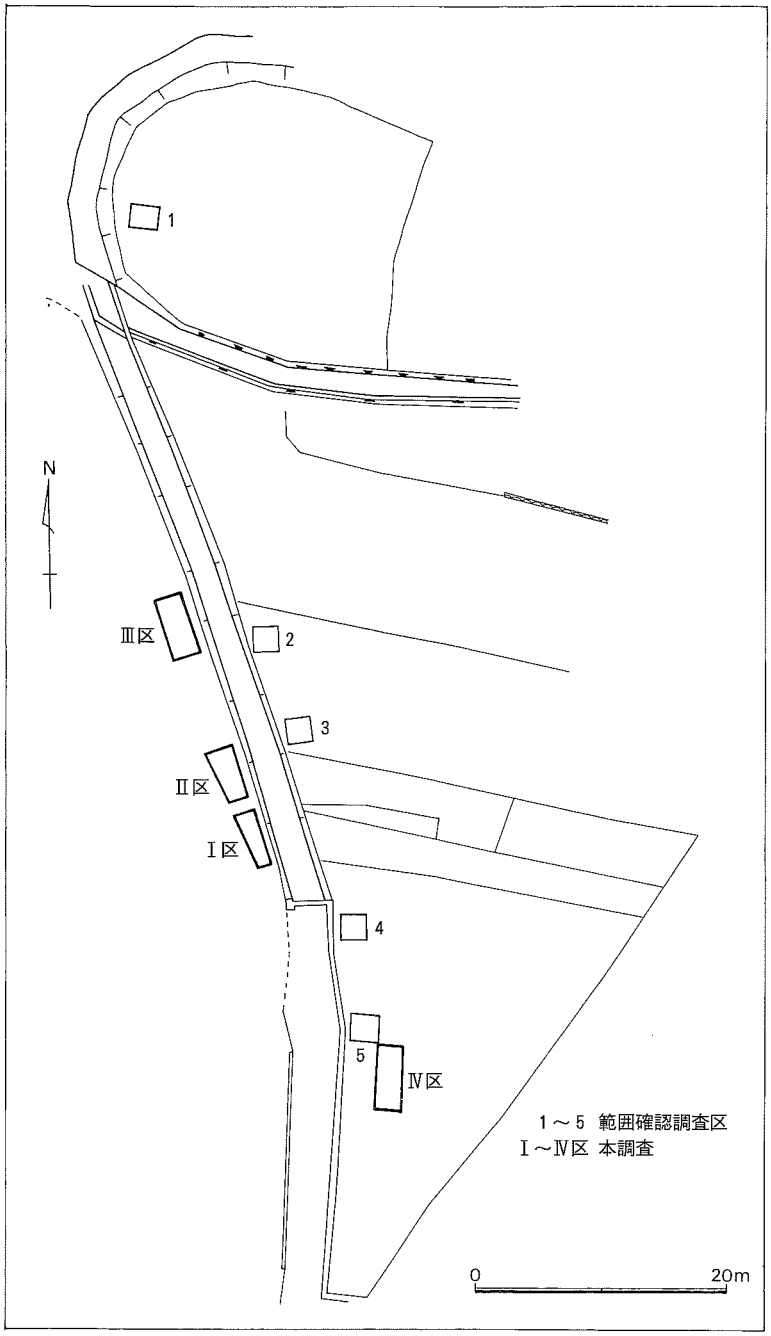
参考文献

長崎県対馬支庁1996『つしま百科』つしま百科編集委員会
角川書店1987『角川日本地名大辞典42長崎県』角川日本地名大辞典編纂委員会
美津島町1978『美津島町誌』美津島町誌編集委員会
長崎県1980『長崎県史　古代・中世編』長崎県史編集委員会
美津島町教育委員会1982『特別史跡金田城跡保存管理計画策定書』

第II章　調査の経緯

1，調査の経緯

水崎遺跡は，昭和60年の県の周知事業の際に新たに登録された遺跡で，多くの朝鮮系陶磁器が採集されていた。地形的には狭小ではあるものの，良好な平地を控えることから建物遺構等があることも予想された。また，この地区を含む尾崎地区には朝鮮国から官職を授けられたことを証明する「朝鮮国告身」が現在も伝世しており，この地区が中世における朝鮮半島との交易の場であったことを示している。今回の調査は，美津島町の林道拡幅工事に伴うもので，現在の道路を２m程拡幅する計画が持ち上がった。この拡幅工事に先立ち，範囲確認調査をおこなうこととなり平成８年３月に２週間の調査をおこなった。試掘では２×２mのグリッドを５箇所設定した。遺物はＩ区～Ｖ区のうちII～III区で出土し，多量の舶載陶磁器を包蔵する中世の遺物包含層が確認された。このことから本調査を実施することとなったが，最初現在の道路の東側を計画していた道路拡幅が，途中で西側を拡幅するという設計変更がなされた。このため本調査は道路西側の拡幅部分となった。調査は，拡幅部分に２×５mのトレンチを３箇所設定して調査をおこなったが，Ｉ・II区では試掘調査と同様に朝鮮半島系の陶磁器・中国系陶磁器・東南アジア系の陶磁器などを中心に豊富な舶載陶磁器の資料とともに，遺構としてピットや焼土などを検出した。III区からもピットを検出したが，遺物量は少なく，土層もＩ・II区とは相違していた。IV区では遺物の出土はなく，土層もＩ・II区のような土壌化した層は検出できず，砂礫層で構成されていたことから，この部分は遺跡の主体から外れているものと考えられる。このことにより，Ｉ・II

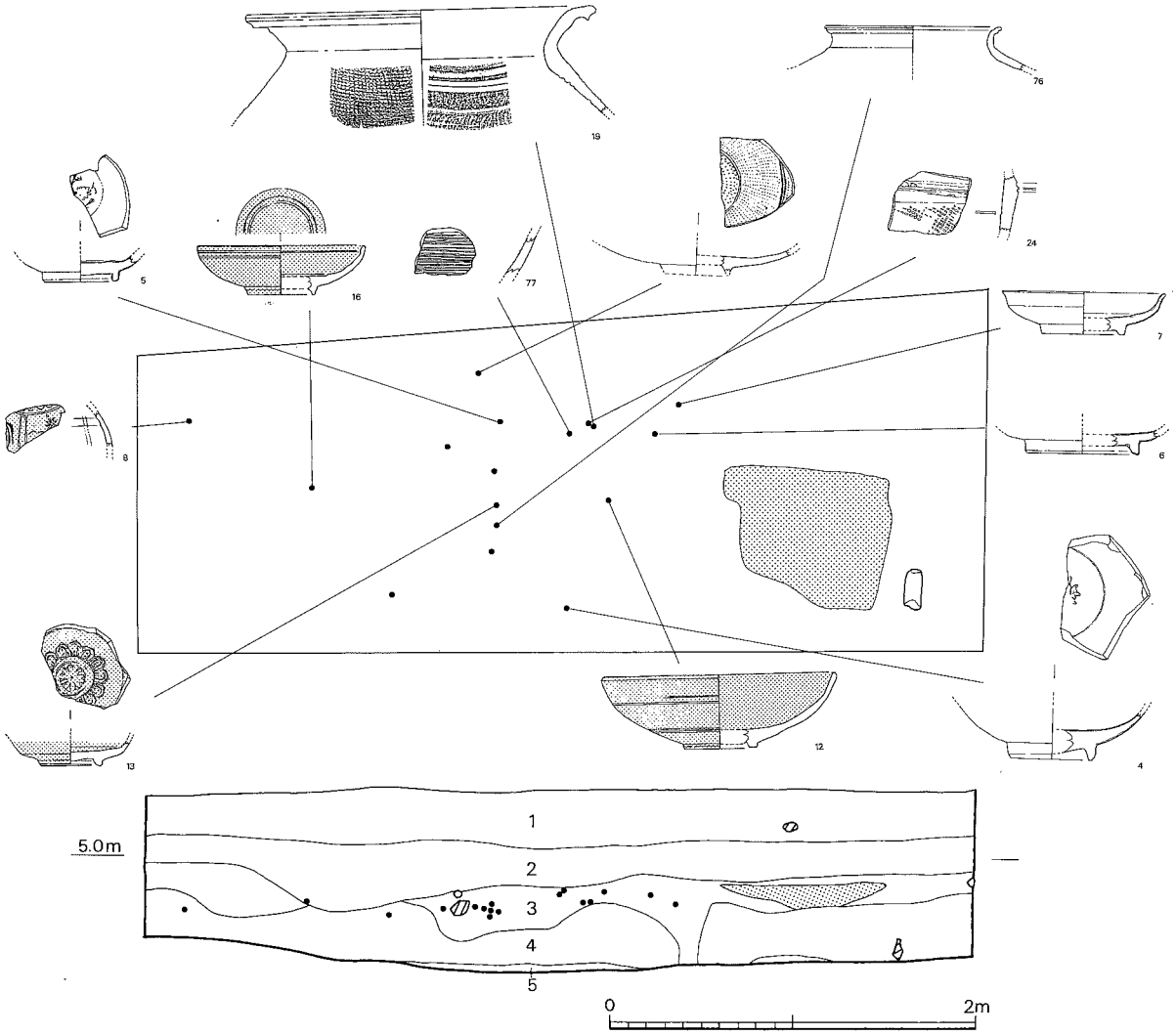


第３図　グリッド配置図（1/600）

区を中心とする西側部分には，かなりの遺構群が包蔵されているものと思われ，対馬の朝鮮半島との交易を調べるうえで重要な遺跡であることが確認された。また，調査面積が狭かったのにも関わらず東南アジア系の遺物が39数点出土し，この地の交易が朝鮮半島のみならず，広範囲に広がっていたことを示す内容となった。

2，土　　層（第3図）

対馬全体が対馬層群と言われる頁岩に覆われており，土地そのものもこの頁岩の風化土からなった痩せた土で構成される。水崎地区も背後を山々に囲まれ，山側から頁岩の剝落した礫層が細かな砂礫層となって堆積している。表面の土は，方柱状に剝離した頁岩からなっており，土も痩せている。今回調査したⅠ～Ⅳ区もこの頁岩を主体とする層である。ここでは遺跡の主体となるⅡ区を中心に土層の説明をおこなう。



第4図　Ⅱ区3層面の遺物出土状況と土層図

1層　表土（対州層群を構成する頁岩の砂礫層から成る。遺物も近世から中世の遺物を含む）

2層　灰褐色砂礫層（堅く締まった層で，やや土壌化しているが小礫が混入している。遺物は粉青沙器・雑釉陶器などが出土するが，時期的には混乱している。）

3層　暗黒褐色粘質土（粘性をもっており炭化物や焼石を含む。包含層の主体となり中世の生活面と思われる。）

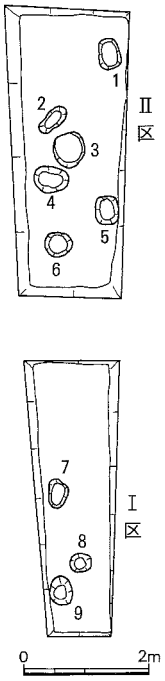
4層　暗灰黄色砂質土層（頁岩が砂礫化した層で，軟質で水分を含む。遺物は出土するが3層との時間的前後関係は摑める状況ではない。）

5層　明黄色砂質土層（無遺物層。硬質で頁岩の砂礫を多量に含む）

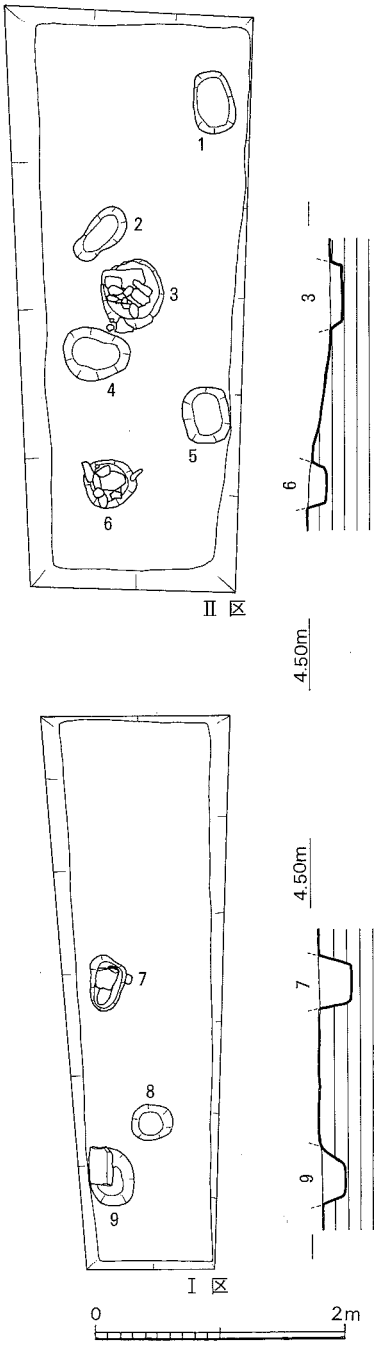
遺物は1層～4層まで出土するが、1・2層は遺物に時期幅があり3・4層に比べ安定していない。3層は遺構の出土などがあり、比較的安定した土層で包含層の主体となる。3層内からは，炭化物や焼土などが出土することから建物の火災等があったことが想定される。ただし，4層上面における整地面は摑めておらず，堆積層そのものが上部からの流れ込みによる堆積の可能性もある。第3図の上図は，比較的安定した包含層を留めたII区の3層での遺物の出土状況である。3層の中でも状態のよい遺物だけのドットであり，全体をあらわしているわけではないが，大まかに3層の時期を知ることが可能であろう。遺物は，東南アジア産の陶器・青磁IV類・象嵌青磁・無釉陶器等が出土しており，これらがほぼ同一の時期である可能性が高いと思われる。

3，遺　　構（第5図）

遺構としては，ピット・焼土が検出された。ピットはI区～III区において12基を確認した。そのうち基底部に敷石を持つものがI・II区のピット番号3・6・7と，III区の1である。II区のピット3・6の間隔は約1.5m，I区のピット7・9間もほぼ1.5mであり，ピット間隔1.5mが一つの基準となる可能性がある。敷



第5図　I～III区のピット検出状況



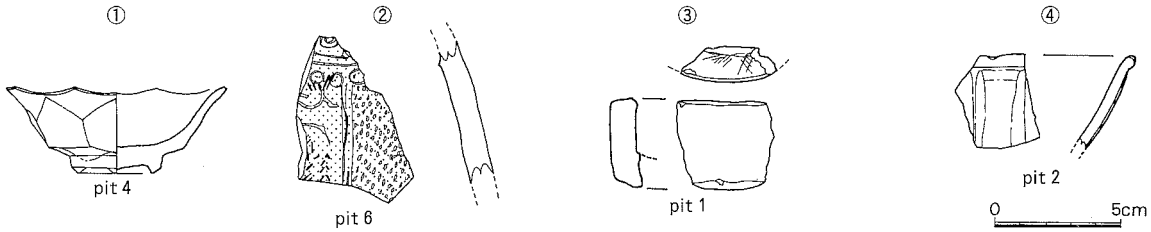
第6図　I・II区ピット実測図（1/60）

石を持つそれぞれのピットは，最下部に平たい厚さ３cm程の石を据え，柱とピット側面の間に石を詰め込んで柱の補強をおこなっている。上部は削平されており，掘り込み面を摑むことはできなかった。ピット内は炭化物等が出土し，出土礫も被熱していることから，火災等に遭った可能性が強い。ピット内からは無釉陶器を主体に，粉青沙器，古銭などが出土している。素堀りピットは全体で８基検出され，３層上部で確認した焼土よりも下位で確認したピットもあるため幾つかの時期差があった可能性が指摘できる。ただし，遺物等からその時代性までは確認することはできない状況であり，今後の面的な調査による解明が望まれる。それぞれのピットは３層の覆土が充填しており，炭化物が多量に混入している。３層のどの面から立ち上がるのか判然としないが，４層を掘り込んでいることから４層形成以前であることは間違いない。焼土遺構は，３層上面において確認された。３層上面はＩ区出土の配石上面にあたり，この面にひとつの生活面があった可能性を示唆する遺構である。焼土は１×１ｍ程の方形を呈し，断面凸レンズ状に堆積している。そばに１個の立石が確認されたが，それ以外は関連する遺構は確認されていない。焼土自体は，Ｉ区の上面確認の２個の礎石と対応する時期の可能性が高く，生活面として２つの時期が考えられる。（福田）

第Ⅲ章　出土遺物

１，遺構出土の遺物

遺構からは白磁皿，粉青沙器象嵌，無釉陶器片，青磁碗等が出土し特に無釉陶器の破片が多く出土した。第７図は，ピット出土の主なものの実測図である。①は，第６図のピット４出土の白磁皿である（第８図３）。表面が被熱している。②はピット６出土の粉青沙器象嵌である。③はピット３出土で滑石の転用品で，小型の円形状のものの真ん中を刳り抜き，容器状を呈する。④はピット２からの出土で，青磁碗である。表面の鎬連弁が四角い形状をし，口縁部は輪花状の刻めを持って丸く納めている。青磁Ⅳ類に含まれるものであろう。この他ピット３からは東南アジア産陶器の底部が出土している。またピット６からは古銭（写真図版７下段・表面が摩滅しており文字判読不明）や，雑釉陶器甕（写真図版７下段）が出土している。また，ピット２からは，第９図19の無釉陶器の破片が出土しており，同じピット２出土の④の資料である青磁と同時期である可能性が高い。これらのピット出土遺物は，①の白磁皿や④青磁碗の遺物からほぼ15世紀前葉を示すことから，ピットの構築時期もこの時期に比定されるものと思われる。今回の調査は，面積的に狭小な範囲であったため，建物遺構の復元や，遺構一括遺物としての提示ができなかったが，遺構のおおまかな所属時期や，遺跡全体に広がるであろう遺構の存在などを予想できたことに大きな意義があろう。



第７図　ピット出土遺物

2，3・4層出土の遺物（第8図～9図）

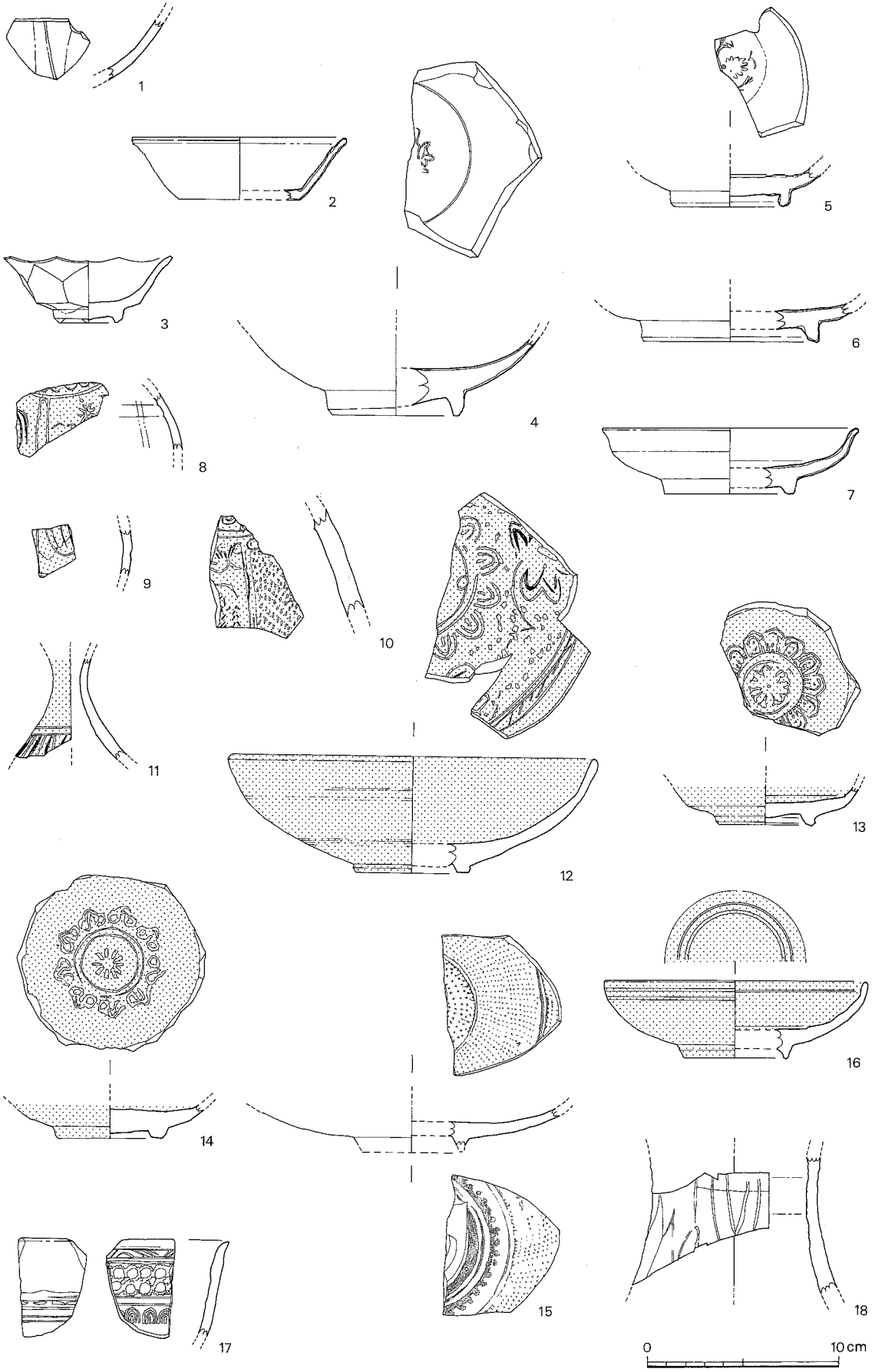
遺物の内容からみれば1・2層は混在した層と見られ，3・4層は遺構や遺物の内容からも整層状態にあるものと判断される。したがってここでは，3・4層出土の遺物を一つの基準として扱い，ほかの遺物についてはその他の遺物ということで説明していくこととする。3・4層出土の遺物の中で古い一群は，木戸編年II類—a—2に相当する石鍋(図28)，鎬蓮弁の青磁碗I—5a類が出土している。その他口禿の白磁皿IX類などが3・4層出土の遺物では古い一群である。1・2層出土のものからは白磁碗II類，(図31)や白磁碗IV類などの出土もあり，本遺跡が12世紀代から歴史の舞台となっていたことの証左となろう。

中国陶磁器（1～7）

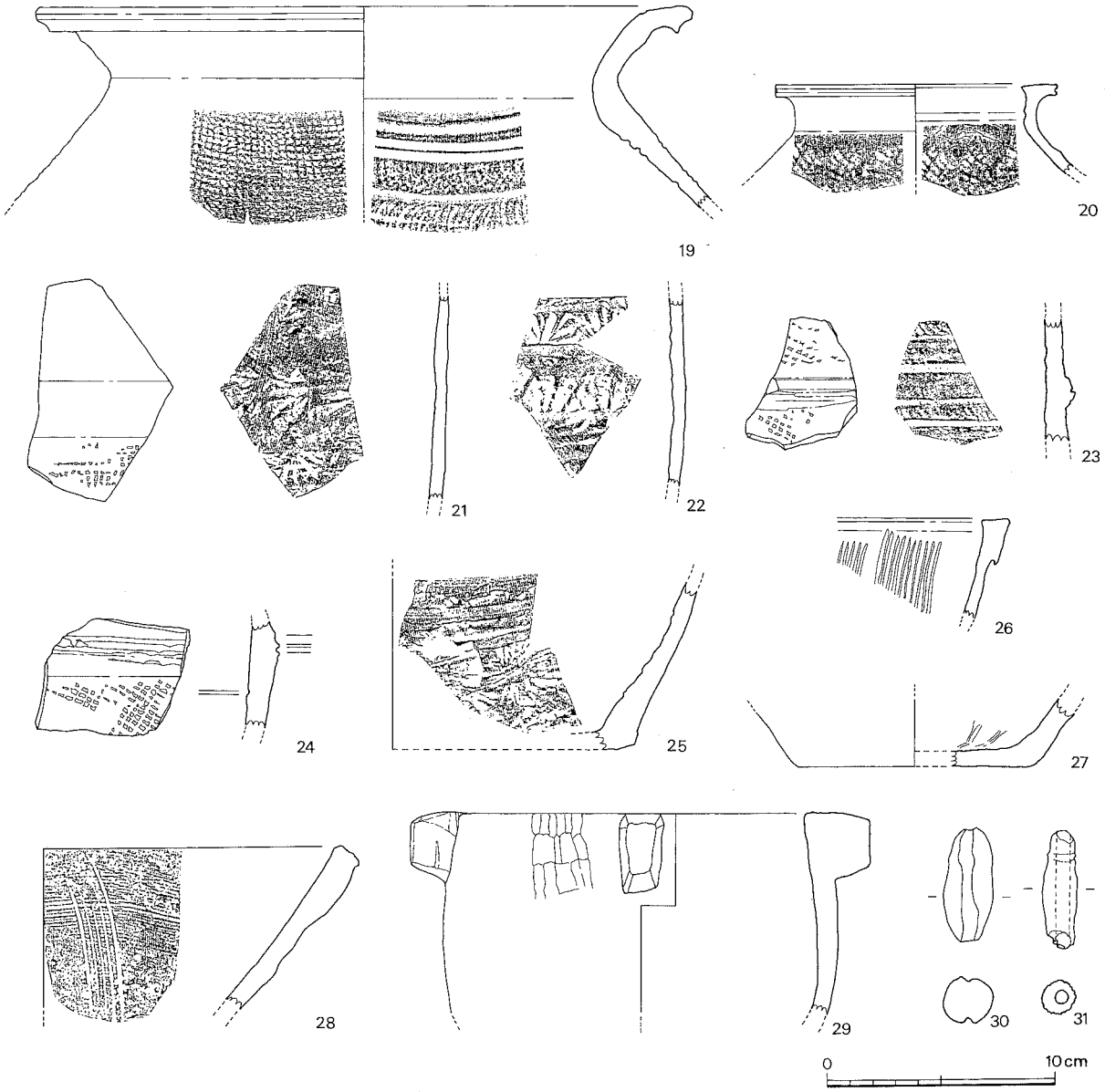
1は鎬連弁の青磁碗I—5a類，2は口禿の白磁皿IX類で，本遺跡では古い一群であるが，数点の出土しかなく，主体となるのは龍泉窯系青磁の一群である。4は見込から底部にかけて暗緑色の釉をかけるが，高台内は露胎で畳付は釉を拭き取る。底部が分厚く全体的に重厚感がある。見込に一条の圏線と中央部に花文が陰刻され，胎土はややざっくりしている。5は濃緑茶色の釉を内外面に施釉するが，底部内外面は釉を剝ぎ取り，見込内面には花文を陰刻する。6・7は青灰色の釉をどっぷりとかけている。5と同様に底部内外面の釉を剝ぎ取り，全体に貫入が入る。以上の4点が中国製の青磁であり14世紀後半～15世紀前半代を示す資料である。ピット内出土資料の3は森田分類の白磁D類であり(森田1982)，15世紀前半代として捉えられることからも本遺跡の主体となる時期を示唆しているものと思われる。

朝鮮王朝陶磁（8～25）

8は，高麗の象嵌青磁の瓶であろう。本遺跡では幾つか象嵌青磁が出土しているが，この資料については釉薬が濃緑色を呈し，胎土が緻密であることから他とはかなり相違する。内部は露胎で釉垂れがある。12世紀後半から13世紀初頭の資料と考えられ，9と共に白磁碗II類や石鍋の資料と対応するものであろう。10は柳を黒土で，雨滴文を白土により象嵌しているが，表面はやや白っぽく象嵌の発色もやや濁った感がする。内部は釉垂れがあるが，基本的に露胎で細かな調整痕がが認められる。11も瓶の頸部で，放射状に黒・白象嵌を交互に垂下させる。胎土に黒い鉱物が目立ち，灰色を呈するいわゆる粉青沙器の一群に含まれるものであろう。12は粉青沙器の皿で口径19.4cmを測る。内面は中央に2重の圏線を持ち，全体に蓮唐草文を配置する。花弁に黒象嵌を一部埋めるが，他は白象嵌である。外面は2重圏線を2段配置するだけである。高台は低く胎土は灰青色を呈し緻密である。内面の2重圏線内び目跡痕が見られ，全体に被熱痕が観察できる。13は途中で腰部が極端に屈曲する坏である。緑灰色の光沢をもつ釉を全体にかけるが畳付け，高台内は釉を拭き取っている。内面は菊花面を中心に剣先文を周囲に配置する。14も13に比べやや大形になる坏で，花文を中心に二重圏線を描きその周りに如意頭文を配置する。文様構成は13と同様であるがやや雑な感がある。15は体高が低い皿で，全体に陰刻を施し，象嵌本来の陰刻を文様として浮き上がらせる手法が全体に陰刻を施すことで反転した例である。内外面ともに白を基調とするものになっている。16は全体被熱しており詳細は判断でき



第8図　II区，3・4層出土の遺物



第9図　II区，3・4層出土の遺物

ないが，外側に二～三重の圏線，内側は見込に何らかの文様を円形に配置し，その周りに二重圏線を象嵌により描いている。内面と体部を区画する削りだしが見られ，体部は口唇部直下で丸く納める。17は白土で象嵌をおこない白磁釉をかけた碗である。このような例は本遺跡ではこの1点だけであり，他の3層の遺物から判断すると，白磁としては比較的早い段階の資料であろう。18は梅瓶の脚の部分で，全体的に被熱しているが，外面に上下から交互に剣先文を描いていることがわかる。胎土は堅緻で内面に細かなロクロ調整の線条痕が残る。第2図は3・4層出土の無釉・雑釉陶器類である。19は外面に細かな格子目の叩き目整形を持つ無釉の甕で，口縁部が肥厚し体部は薄身であることを特徴とする。焼成は堅緻で，胎土は茶褐色を呈する。内部も叩きでの整形が認められるが，その上から区画するような凹線により潰れている。23・24がその胴部と思われ胴部中央に帯状の粘土を張り付け，その上にヘラ状工具によって鋭い沈線を入れることを特徴とする。21・22は，黒緑色の雑釉を全面の施

釉するもので，全体に光沢がある。外面は細かな格子目の叩き痕が観察できるが，撫で消してありその後に釉薬を施している。内面は千鳥叩き目整形をおこなうがその後に一定の間隔をもって撫で消すことは先の無釉陶器と同じである。内面はやや雑で，内面調整は古い段階の朝鮮産無釉陶器に酷似する。25は無釉陶器の底部資料であるが，外面に細かな格子叩き目があり，底部付近は全体を撫で消している。内面は千鳥叩き目により整形した後にヘラ状工具によってさらに整形することによって叩き目の一部が消されている。19～25の資料のように甕の中でも表面に釉薬を施すものや，内面の調整が異なるものが看取できるがこれが時期差からくるものか，窯の違いによる差なのかについては判断しかねる。ただし，本遺跡の主体が中国の青磁から判断すれば14世紀後半から15世紀代に納まることから，この時期のなかで捉えることが可能と考えられ，12世紀～13世紀前半でおさえられる対馬上県町の大石遺跡・峰町の木坂海神神社弥勒堂跡出土の無釉陶器，16～17世紀前半でおさえられる厳原町の桟原城跡出土の雑釉陶器類とを結ぶ位置にあることは間違いない。（古門1996，安楽1993，福田1995）

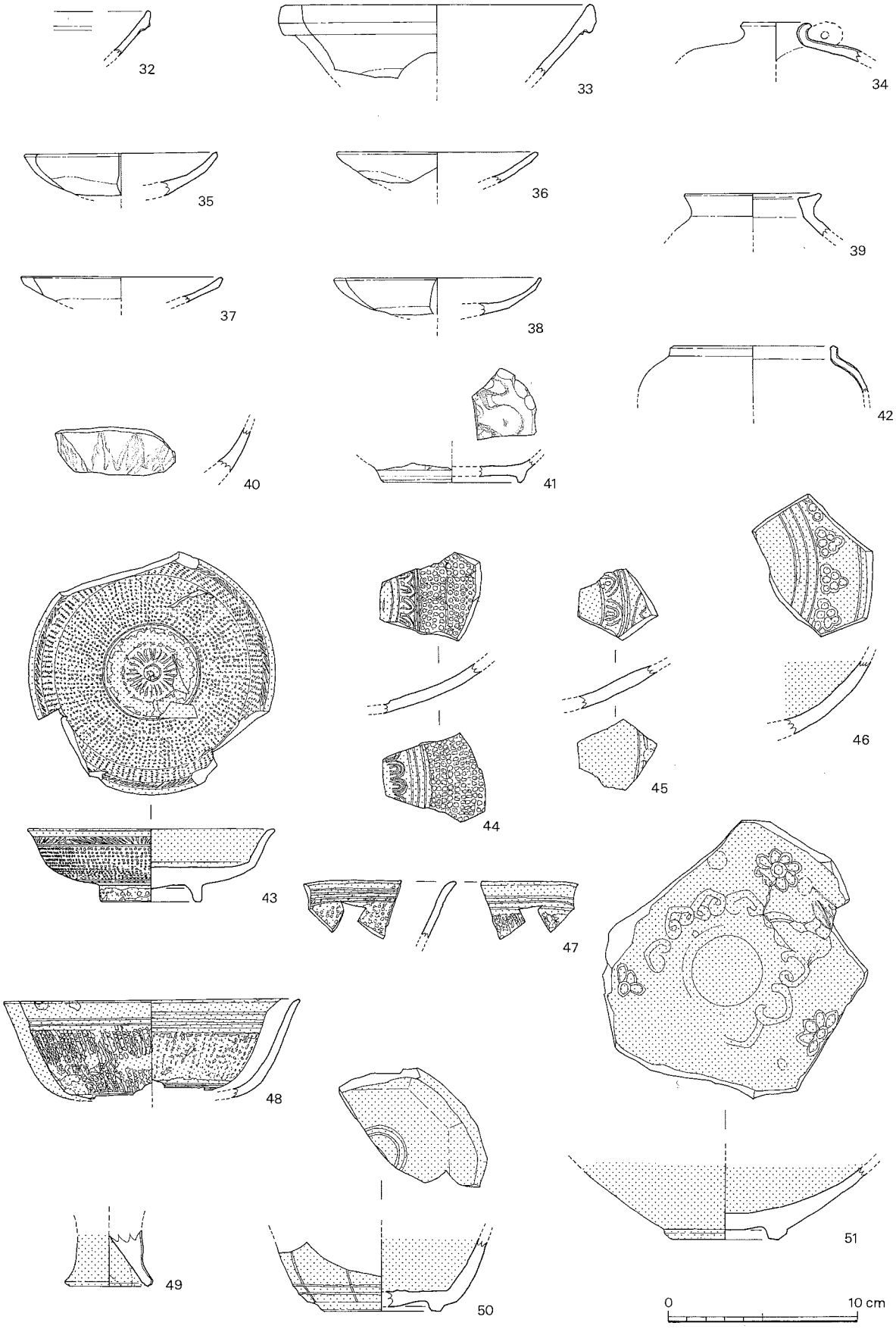
国産陶器・滑石製石鍋・土錘（27～31）

27は備前の擂鉢の底部，28は瓦質のもので内面は横に細かな調整痕があり，そこに縦方向に５本の擂り目が入る。産地については不明で，在地系のものとしておく。29は木戸雅寿編年のII類－ａ－２に相当するもので，本遺跡でも若干出土している古相の貿易磁の一群と同時期のものであろう。

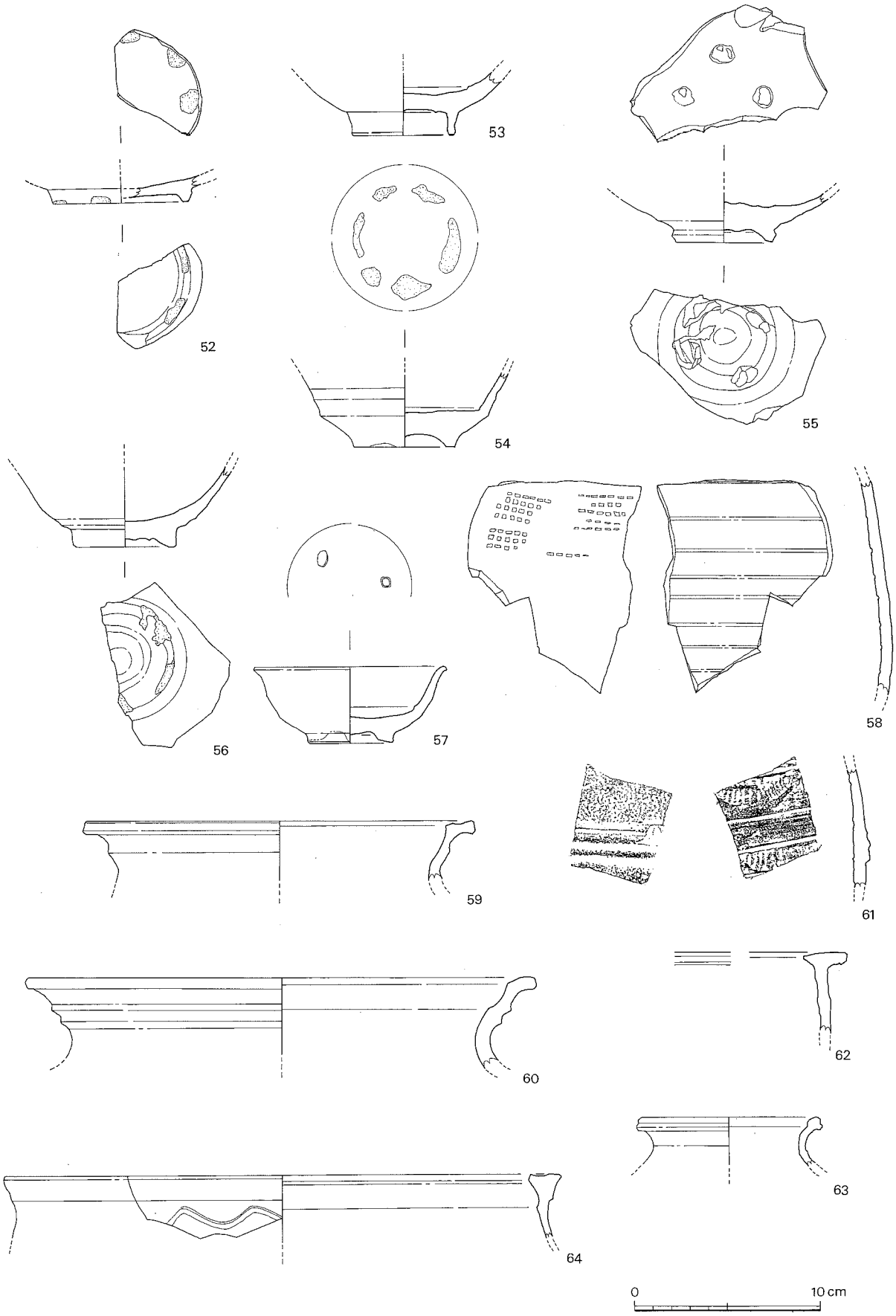
30・31は土錘で５点出土している。30は切目を入れた例で，他は31と同様の通常のものである。

３，その他の遺物（図32～64）

ここでは，範囲確認調査時の遺物と本調査の１・２層出土の遺物を扱う。32は白磁碗II類の口縁部，33は白磁碗IV類で本遺跡で古い一群であるが数量的には少ない。34は青磁小壺で，肩部に双耳をもつものであろう。35～38は森田編年の白磁皿Ｄ類であり，第１図３と同様に高台に削りが入る一群である。15世紀代に編年されており，図化していない物にもこの種の白磁皿があり，青磁碗と同時に本遺跡の編年上の基準となる資料である。39は表面茶褐色で光沢のある小壺で，口唇部をつまみだし凹部を作りだしていることから蓋を持つものであろう。40・41は小野編年の染付碗Ｃ群と染付皿Ｂ１群である。15・16世紀に比定されるものである。42は内外とも天目釉を施釉する小壺である。体部は丸く口縁部が短く直立する。口唇部と口縁部内側は露胎であり，蓋物であろう。胎土は堅緻で焼成とも良好な優品である。49を除く43～51は粉青沙器の一群である。43は口径12.8cmを測る杯である。内外面共に印花で覆われ青磁釉の部分が少ない。高台内は釉薬が拭き取られ，内部に「刑」？の字を刻んでいる。44・45は皿の底部付近で44が内外面に圏線と剣先紋を中心に上部に菊花紋を密集させたのに対し，45は内面に圏線と剣先紋を上部に草花文？，外面は圏線のみとなる。45が胎土が緻密で青磁釉の発色も良好であることや，文様構成から古相を呈するものと考える。44は被熱している。46も見込に圏線とその上に丸紋を三段に組み合わせた紋を印刻しており，外面上部はわからないが残存部分は文様がない。見込内に胎土目が観察できる。47は端反りになる碗の口縁部で，内外面に彫りの深い三重圏線と細かな花紋を配置し，内面に比べ外面は白土が薄い。胎土，焼成とも堅緻である。48は内外面とも圏線下に印花が施されているが，印花手法そのものは雑になっている。胎土，焼成とも47ほど堅緻で



第10図　その他の出土遺物



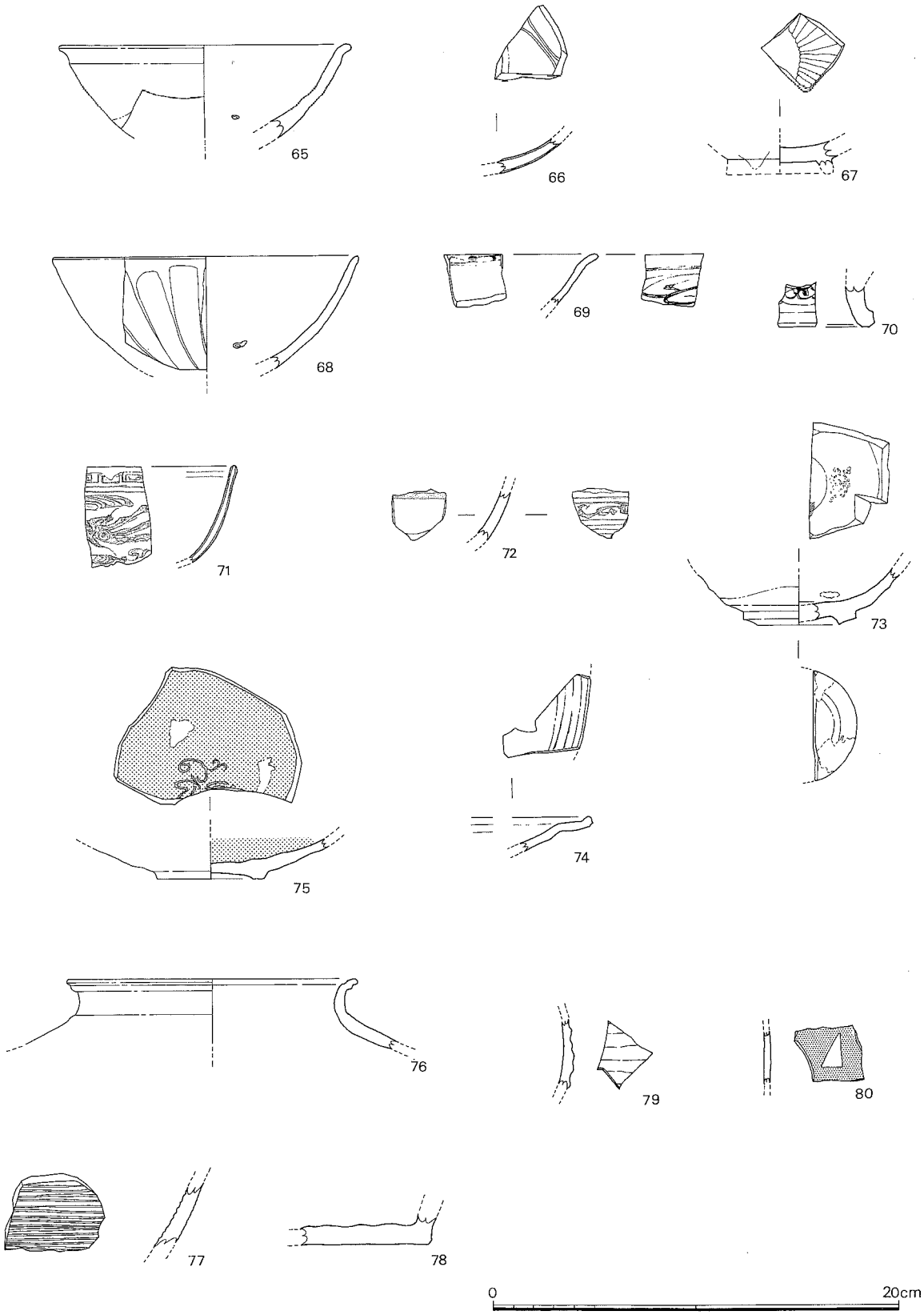
第11図　その他の出土遺物

はないが，文様構成そのものは同様である。49は青磁の馬上杯の脚部である。外面に厚く青磁釉をかけ，内面一部施釉されているが畳付けの部分は施釉後に削り出されている。内部は三角錐状に削り出されている。50は六角形に面取りした杯の底部。全体に被熱しており文様構成等は不明であるが，見込に２重圏線陽刻されており，外面の六角の面取り端には白土を象嵌したものと思われる痕跡がある。51は大形の鉢で，全体に被熱し見込に如意頭紋を中心に据えその周りに花紋を印刻する。ただし，白土が充塡されていない。高台は低く，重量感がある。胎土はザックリしており一部黄橙色を呈する。52は白磁皿で見込に砂目跡が残り，全体で８箇所あるものと思われる。全体に貫入が入り，釉薬は全体にかける。この手の白磁は本遺跡では１点の出土でしかなく，16世紀後半の所産であろう。53は見込に鏡面を持ち，段差がつけられおり，いわゆる堅手の白磁碗である。釉は灰白色の光沢のあるもので，全面施釉するが畳付のみ釉を拭き取る。桟原城跡に類例が見られ16世紀後半～17世紀前半に位置づけられるであろう(福田1995)。54は光沢のある灰黄白色の釉を全体施釉する杯である。底部は重量感があり，高台は内外面から緩やかに立ち上がり，高台内は球形を呈する。55は白磁の皿で，高台は竹の節状を呈し，畳付けは外傾し高台内は露胎である。見込に大きな目跡があり，高台の畳付けにおける打ち欠き痕が特徴的である。56は雑釉陶器で全体に灰緑色の釉を全体にかけ，畳付けに砂目跡が残る。高台内は渦巻き状に削り出される。胎土に黒色・白色の微細な鉱物を混入する。57は見込に目跡が打ち欠かれた状態で残存し，高台畳付けも打ち欠き痕を残す小碗である。見込みを削りだして平坦に仕上げ，段がある部分で見込と体部の境界とする。体部から口縁部に至るまでほぼ同一の厚みで，口縁端部で外傾する。釉薬は灰青褐色を呈し，高台を除き全体に施釉する。52・53・55は白磁であることは間違いないが，54・56・57については雑釉陶器とすべきか磁器として扱うか判断に苦慮するところである。58～64については施釉陶器の甕・壺類である。58は赤みの強い紫色の胎土で，全面に紫色の釉を施こす。外面は格子目の叩きが入るが，撫で消した後に施釉し，内面は丸い叩きを撫で消したあとにほぼ等間隔に沈線を入れることを特徴とする。59・60は甕の口縁部で雑釉を内外面に施釉し，口縁が大きく開き，外面に段をを有する。61は外面は施釉するが，内面は無釉で叩き整形した後に撫で，最後に沈線を入れる。内部はいわゆる朝鮮産無釉陶器の調整に近い。62は口縁部を平坦に仕上げ，内部に口縁が突き出しＴ字型を呈する。平坦部に貝目が残ることを特徴とする。63は口縁部が極端に外反する小壺である。64は他の甕類と口縁部において相違し，胴が口縁直下より膨らむ。全体に茶褐色の釉がかかるが，口縁の平坦部は釉が拭き取られている。また，胴部に波状の沈線を施すことも大きな特徴で，朝鮮産無釉陶器に見られる文様を踏襲しているものと考えられる。　　（福田）

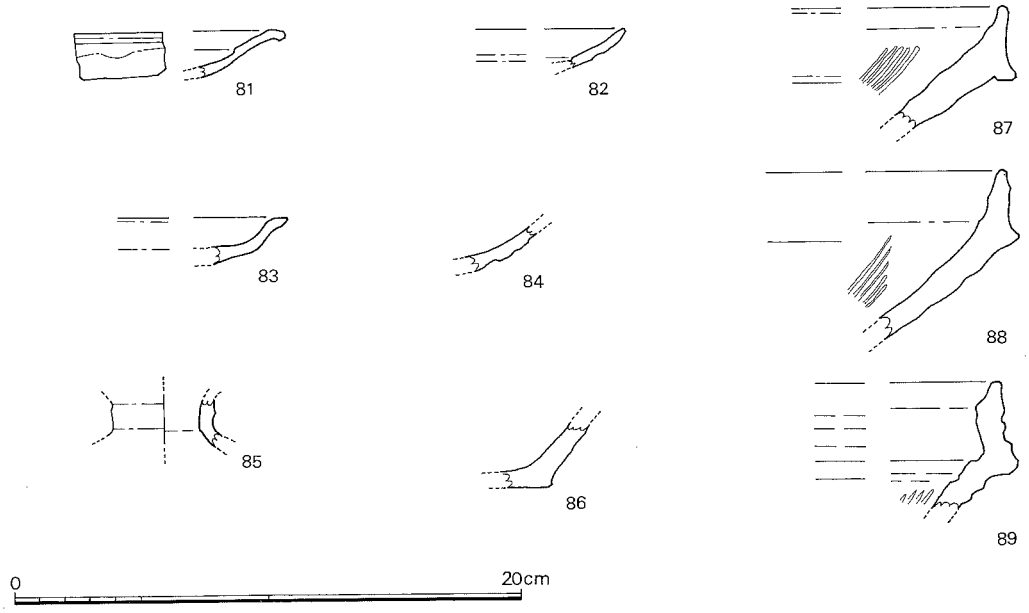
４，東南アジア産の遺物（第12図）

東南アジア産と考えられる遺物は，合計39点が確認された(註１)。内訳は青磁11点，白磁２点，青花４点，鉄絵６点，褐釉１点，軟質陶器15点となっている。16点を図化した。

65～67は，ベトナム産の青磁碗と考えられる。65は淡緑灰色釉がかかり，体下部から底部にかけて露胎である。胎土は灰褐色を呈しザクザクとしている。見込に目跡が認められる。66は印花文碗の底部で，黄緑色釉がかかる。胎土は黄灰色で焼成が甘くザクザクとしており見込の一部は露胎となるよ



第12図　東南アジア産の遺物（1/3）



第13図　国産の遺物（1/3）

うである。67も印花文碗の底部で淡緑灰色釉がかかる。胎土は黄白灰色でやや焼成が甘く，底部は露胎となっている。見込に放射状の花文が印刻される。

68は，ベトナム産の白磁鎬文碗と考えられる。化粧土の上に透明釉がかかり，乳白色を呈する。胎土は，白灰色の陶質でザクザクとした印象を受ける。外面に鎬蓮弁文を施し，見込には目跡がのこる。

69・70は，ベトナム産の青花と考えられる。69は，唐草文の鉢ないし碗で，口縁部内面と体外面に唐草文をかく。呉須の発色はやや悪く器表は汚れる。胎土は灰色でザクザクとしており，焼成はやや甘い。70は，壺・瓶類の脚部と考えられる。内外面とも施釉されるが，接地部は露胎となっている。胎土は白灰色で焼成は比較的に良い。外面には唐草が描かれるが，呉須の発色は良い。

71は，東南アジアあるいは中国南部産の青花碗または鉢と考えられる。外面に雷文と鳳凰文を描くが，呉須の発色が悪く暗灰色を呈する。胎土は灰褐色を呈し，焼成はやや甘い。

72・74は，タイ産の鉄絵と考えられる（註２）。72は，小片のため器形が不明であるが，おそらく碗の一部と考えられる。化粧土の白地の上に鉄で圏線と崩れた唐草文を描くが，器表が汚れて全体的に灰褐色を呈している。胎土は暗灰色の陶質で，細かい砂粒を含む。74は，盤の口縁部と考えられる。胎土は暗灰色で白色の化粧土をかけ，鉄で文様を描き透明釉をかける。口縁屈曲部内面に２状の圏線をかく。器表は汚れている。

73は，小型の杯または碗と考えられる。見込の一部に鉄絵が認められる。胎土は黄灰褐色の陶質でザクザクとしており，化粧土をかける。高台畳付けと見込に目跡がのこる（註３）。

75は，東南アジア産の可能性がある褐釉の皿である（註４）。内面に褐色釉がかかり，見込に草花文が陽刻される。胎土は灰色で比較的細いが石英粒を含む。見込に重ね焼きの跡がのこる。

76～80は，東南アジア産と考えられる陶器である（註５）。76・77・78は，胎土から同一個体と判断

される。器表は暗褐色から黄橙色を呈するが，部分的に赤みを帯びる箇所もある。胎土はやや粗く，軟質で金雲母と石英を含んでいる。成形は外面タタキ，内面ハケメで轆轤の回転は反時計回りである。口唇部の内外面にそれぞれ沈線が認められる。ハンネラ壺か。79は，器形不明であるが，小型の壺類とも考えられる。胎土は灰色を呈し，石英粒を多く含むが，焼成は良く硬質である。80は，器形不明の軟質陶器である。胎土はやや粗く長石粒を含み，灰褐色を呈する。外面には赤色の化粧土あるいは顔料の塗布が認められる。

以上の資料に関して補足的に説明を加えたい。東南アジア産の陶磁器は，壱岐の覩城跡でもまとまって出土している(川口1997)。両者を比較すると，ベトナム産の陶磁器では，見込印花文を施す青磁碗，白磁鎬文碗など共通する遺物が多く，ほぼ同時期の資料と考えられる。一方，水崎遺跡の資料には，覩城跡ではみられなかった軟質の陶器が少なからず含まれており，タイ産の可能性も指摘される。調査面積からしても，水崎遺跡における東南アジア産陶磁器の出土比率は驚くほど高い。このことが，中世後期の対馬における一般的な現象であるのかどうか，今後の出土状況がきわめて注目されよう。いずれにせよ，壱岐・対馬における東南アジア産陶磁器の出土は，琉球王国を仲介とした東シナ海における交易を具体的に実証する貴重な発見ということができる。今後，これらの資料が，博多や朝鮮半島にどのように流入したのかを検討する必要があろう。

5，国産の遺物（第13図）

国産の遺物は28点が出土した。内訳は，備前８点，信楽２点，瓦質すり鉢４点，産地不明14点となっている。９点を図化した。

81～85は当初，古瀬戸と認定した資料であるが，その後の調査で産地不明としたものである（註６）。81は皿で，緑灰色のガラス質釉が内面から口縁部外面にかけてかかり，体下部は露胎となっている。胎土は灰色で，比較的に細かい。体部から口縁部にかけては外反ぎみに立ち上がり器高は低い。内面には中位に段が認められる。82は皿で，緑灰色釉がかかる。胎土は灰色でやや粗い。体外面に波打つような段が認められる。83は皿で緑灰色のガラス質釉がかかる。胎土は灰色で比較的細かい。体下部で屈曲し口縁部にかけて外反ぎみに立ち上がる。84は皿と考えられる。茶褐色のガラス質釉がかかり，胎土は灰色でザクザクとしている。82に似て外面に波状の段がみられる。85は瓶の頸部と考えられる。暗緑灰色のガラス質釉がかかる。胎土は灰色で細かい。

86は信楽産の小壺の底部と考えられる。胎土は茶褐色で石英・長石の大粒を含む。外面には黄褐色の自然釉がかかり，長石粒の吹き出しが目立つ。他に肩部と考えられる小片が出土している。

87～89は，備前産のすり鉢である。87は暗赤褐色を呈し，堅緻に焼き締められる。荻野繁春の分類・編年（註７）によるＸ期に相当しよう。88は青灰色を呈し焼成堅緻であるが，胎土はやや粗い。やはり荻野氏のＸ期に位置づけられよう。89は青灰色を呈し，焼成堅緻である。荻野氏ＸＩ期に相当するものであろう。

以上の国産の遺物を概観していえることは，九州本土部で一般的な土師皿が全くみられないことが第一にあげられる。いわゆる「かわらけ」は，壱岐の中世遺跡でも一般的に出土するが，本遺跡で１

点も出土しないことは，遺跡の性格を推定する上で重要な傾向といえるだろう。また，備前の流通が対馬まで及び，比較的まとまった量が出土していることも注目される。中世後期の日本人の行動範囲を考えると，その流通は朝鮮半島にまで及ぶことも推測され，今後の出土状況が注目されよう。さらに数は少ないが，信楽産の陶器の出土は本県域の出土例としても珍しい。産地の認定ができなかった資料については，さらに調査を継続し，機会を改めて報告することとしたい。　　(川口)

【註】

1．認定に際しては，福岡市美術館の尾崎直人，太宰府市教育委員会の山本信夫，堺市教育委員会の森村健一の各氏に御教示をいただいた。
2．福岡市教育委員会の森本朝子，山口県立萩美術館の宮田絵津子の両氏に御教示をいただいた。
3．森本氏から磁州窯系との御教示をいただいた。
4．森村氏は，唐津系の可能性を指摘されたが，文様・胎土の特徴から東南アジア産とした。
5．森村氏の御教示による。
6．北九州市教育文化事業団埋蔵文化財調査室の佐藤浩司氏，愛知県陶磁資料館の仲野泰祐氏に実見していただいた。
7．荻野氏は，X期について16世紀前葉から中葉，XI期について16世紀後葉から17世紀前葉の実年代を想定している（荻野1990)。

【引用・参考文献】

尾崎直人編1992『ベトナムの陶磁』福岡市美術館
尾崎直人編1996『タイ・カンボジアの陶磁』福岡市美術館
荻野繁春1990「財産目録に顔を出さない焼物たち」『国立歴史民俗博物館研究報告』第25集　国立歴史民俗博物館
川口洋平・松永泰彦1997『覩城跡』原の辻遺跡調査事務所調査報告書第3集　長崎県教育委員会
根津美術館編1993『南蛮・島物―南海請来の茶陶―』根津美術館
福田一志1995『桟原城跡』厳原町文化財調査報告　第4集　厳原町教育委員会
古門雅高1996『大石原遺跡』上県町文化財調査報告書　第1集　長崎県上県町教育委員会
山本信夫1995「中世前期の貿易陶磁器」『概説　中世の土器・陶磁器』中世土器研究会編　真陽社
森田　勉1982「14～16世紀の白磁の分類と編年」『貿易陶磁研究No.2』日本貿易陶磁研究会
上田秀夫1985「根来寺における高麗・李朝の陶磁器について」『貿易陶磁研究No.5』　日本貿易陶磁器研究会
安楽　勉・阿比留伴次1993『木坂海神神社弥勒堂跡』峰町文化財調査報告書第11集　峰町教育委員会
(追)校正中に，森本朝子氏から，本遺跡出土の青磁について，沖縄の勝連城跡出土の青磁と類似しているとの御指摘をいただいた。記して感謝申し上げたい。

表１　出土陶磁器観察表

No.	出土区	層位	器　種	備　　考
1	2－II	4	青磁碗	
2	2－II	3	白磁坏	口禿
3	2－II	3	白磁皿	ピット４出土，被熱痕有
4	2－II		青磁碗	見込にスタンプ。高台内露胎
5	2－II	3	青磁坏？	見込にスタンプがあるが，露胎。高台内も露胎。
6	2－II	3	青磁盤？	見込，高台内ともに露胎。胎土は灰色を呈し，黒色の鉱物を含む。
7	2－II	3	青磁坏	見込，高台内ともに露胎。胎土は灰色を呈し，黒色の鉱物を含む。
8	2－II	3	瓶	釉が深い緑色を呈する。内部は露胎。白と黒の象嵌を施す。内面は露胎で胎土焼成とも良好。
9	2－II	4	瓶	９と同様に胎土に不純物を含まないもので，内部は露胎。古手の象嵌青磁であろう。
10	2－II		瓶	釉が白身の強い濁った緑色を呈し，器壁が厚みがある。９・10より新しい象嵌青磁か？ピット５より出土。
11	2－II	4	瓶	釉は灰色に近く，象嵌は単調な直線により構成される。
12	2－II	3		青磁象嵌蓮唐草紋大接。見込に目跡が残る。胎土がきめ細かく，良好である。
13	2－II	3	坏？	中央に菊を，その周囲に剣先紋を白土象嵌により配している。見込は平坦に削り出され，急激な屈曲を見せる。
14	2－II	3	坏？	13と構図・器形とも同様であるが，見込の菊花を中心に如意紋を配している。
15	2－II	3		大接？　胎土は灰色を呈し，細かな気泡が観察される。細かな菊花紋の印花が密に配される。
16	2－II	3	皿	全体被熱し，本来の粉青の部分が焼けて表面に気泡が入る。本来見込に13・14と同様な構図をもつものと思われる。
17	2－II	3	碗	基本的には白磁に分類されるものと思われる。胎土は，灰白色を呈し微細な黒い鉱物が入る。
18	2－III	3	梅瓶	表面が被熱し，象嵌の部分が火膨れ状になる。剣先紋が確認されるが白土と黒土の構成があるのかどうかは定かでない。
19	2－II	3	甕	外面は細かな格子目叩き，内面は丸い叩き痕が残るが，その後に撫で整形をおこなう。口縁部が極度に反転して肥厚する。
20	2－II	4	甕	口唇部が平坦で，貝目がつく。外面は格子叩き，内面も格子目叩き痕がある。唐津の可能性もあるが，あえて朝鮮王朝雑釉陶器とした。
21	2－II	3	甕	表面に細かな格子叩き痕が残るが，その上から光沢のある釉をかけている。胎土は，いわゆる初期の無釉陶器と同じである。
22	2－II	3	甕	21と同。
23	2－II	3	甕	19の甕と同一個体と思われる。格子目の叩きで整形した後，中央の突帯を張り付ける。
24	2－II	3	甕	19・23と同一個体と思われる。
25	2－II	4	甕	内外面の叩き等から，19・23・24と同一のものであろう。
26	2－II	4	擂鉢	口唇部を平坦にし，外側に折り返すことを特徴とする。体部は薄く，擂り目は５本を単位として浅く施す。
27	2－II	3	擂鉢	備前
28	2－II	4	擂鉢	在地系の擂鉢。瓦質
29	2－III	3	石鍋	口径が小さい縦耳のもので，外面上部に煤が付着。
30	2－II	4	土錘	
31	2－II	4	土錘	
32	2－I	表土	白磁碗	白磁碗II類
33	2－III	表土	白磁碗	白磁碗IV類
34	2－II	表土	青磁壺	胴部が極端に張り出し，口縁部に耳をもつ。胎土は灰白色を呈し，微細な黒色の鉱物が入る。
35	1－4	1・2	白磁皿	陶胎のものに，白磁釉を内面と外面の上部に施す。
36	1－3	1・2	白磁皿	〃
37	1－4	1・2	白磁皿	〃
38	1－3	1・2	白磁皿	〃
39	1－2	1・2	壺	茶褐色の釉を内外面ともに施す。口縁部は平坦で外側に開く。全体に光沢をもつ。
40	2－III	2	染付碗	
41	1－2	1・2	染付皿	
42	1－3	1・2	天目釉壺	ひじょうに光沢の強い天目釉で，内外面ともに施釉。口唇部と頸部内面は無釉。茶壺と思われ，蓋物であろう。
43	1－4	1・2	坏？	内外面ともに密に印花を施し，白土が目立つ。高台内に刑の文字が刻んである。
44	1－4	表土	皿？	内外面剣先紋と円紋を基調とする文様構成である。
45	1－2	1・2	皿？	青磁釉が他と異なり灰緑色を呈する。他の象嵌青磁より胎土の良好である。

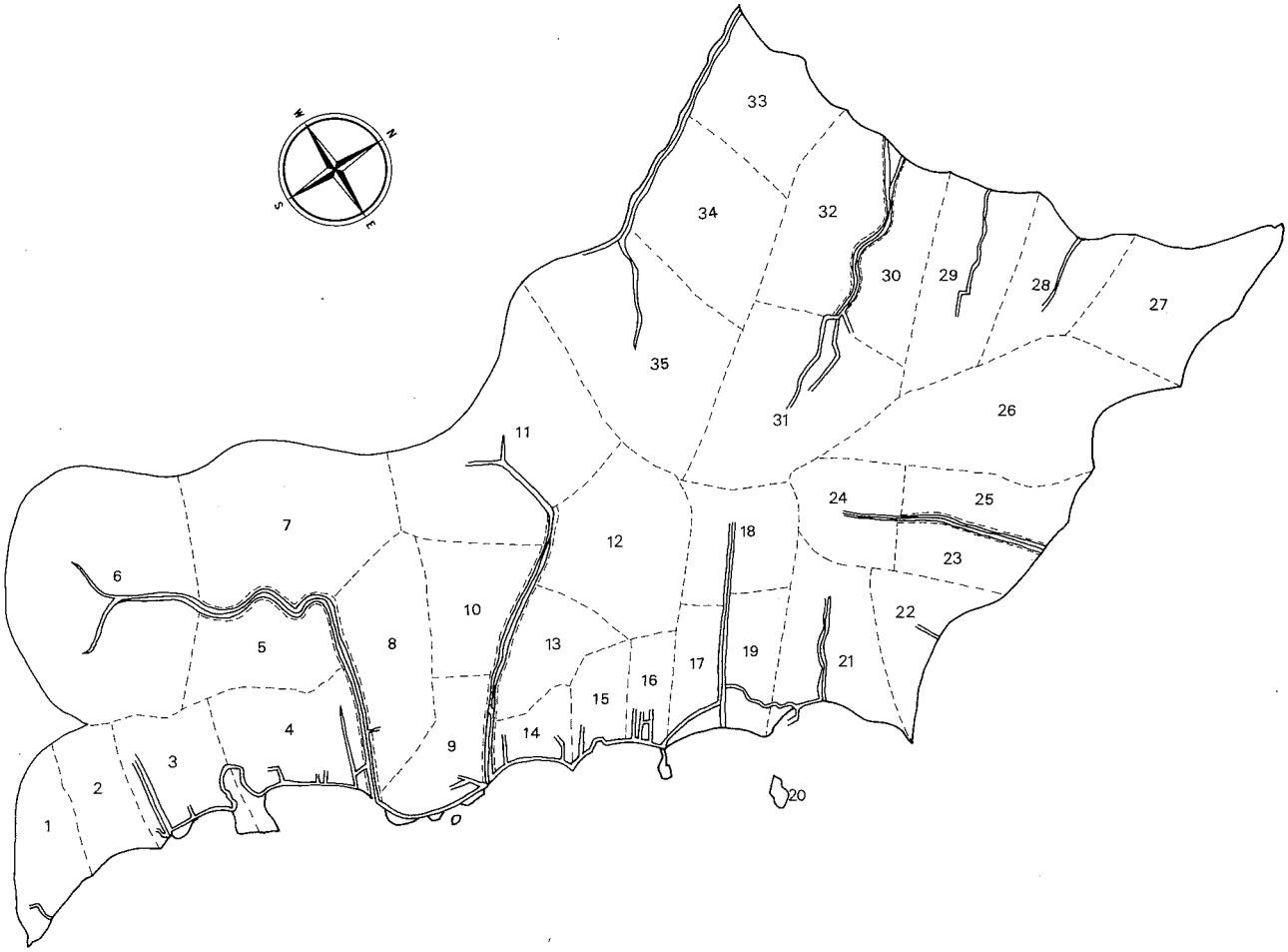
表 2　出土陶磁器観察表

No.	出土区	層位	器　種	備　　考
46	1－4	1・2	皿？	見込に目跡が残る。
47	1－4	1・2	碗	口縁部が端反りになり，象嵌も雑然としている。内面には全体的に象嵌している。
48	1－4	1・2	碗	内外面の上部は圏線，その下に退化した連続の象嵌をおこなう。被熱痕あり。
49	2－I	2	馬上坏	青磁釉を厚くかけ，畳付けの部分は釉を掻き取る。高台内は三角錐状に削り出す。
50	1－2	1・2	坏	六角形を呈する坏で，見込に二重圏線が見られるが被熱しており，文様構成は定かでない。釉薬は全体にかける。
51	2－I	2	皿？	高台が低く，竹の節状になる。見込に如意頭紋を配すが，焼成が悪いため発色不良である。
52	2－I	2	白磁皿	砂目が8箇所有り。細かな貫入が一面にはいる。濁白色細かな黒い鉱物
53	2－III	表土	白磁碗	底部を平坦に仕上げ，鏡面とすることにより体部とに段差を持つ。17世紀代のものか？
54	2－III	2	坏	胎土は細かな砂粒状で，黒い鉱物がめだつ。濁白色の釉を全体に施釉し，光沢が強い。
55	1－2	1・2	白磁碗	見込に4つの目跡（胎土目状）が確認される。高台際まで施釉するが，高台内は露胎。
56	1－5	1・2	碗	灰褐色のザックリした胎土で，黒色・白色の鉱物が入る。高台に砂目痕が残る。
57	2－III	3	碗	見込を平坦に削りだし，体部との境に段を持つ。見込に目跡2つが確認される。高台の畳付けに4つの打ち欠き痕がある。
58	1－2	3	甕	灰緑色の釉で胎土は茶褐色。
59	1－5	1・2	甕	明茶褐色の胎土。口縁部がラッパ状に開く。
60	2－I	2	甕	59と同様の口縁で，全体に灰緑色の釉がかかる。
61	2－II	2	甕	外面のみ光沢のある緑灰色の釉を施し，内面は古い一群の無釉陶器に似る。
62	1－5	1・2	甕	20と同様に口縁の平坦部に貝目をもつ。内外面ともに灰緑色のの釉をかける。
63	1－5	1・2	壷	
64	2－III	表土	甕	明茶褐色の釉を施し，口縁の平坦部は拭き取る。外面に波状の沈線があることが特徴。
65	2－III	2	青磁碗	ベトナム
66	2	表土	青磁碗	ベトナム
67	2－II	2	青磁碗	ベトナム
68	15－A		白磁碗	ベトナム
69	3	1・2	青花碗	ベトナム
70	1－II	2	青花碗	ベトナム
71	15－2	2	青花碗	中国南部またはベトナム
72	2	2	鉄絵杯か	タイ
73	2－I	2	鉄絵杯	磁州窯系
74	3－I	2	鉄絵盤	タイ
75	1	4	褐釉皿	東南アジア産か
76	1	3	軟質陶器壺	東南アジア産か
77	P－4		軟質陶器壺	東南アジア産か
78	2	4	軟質陶器壺	東南アジア産か
79	1	3	軟質陶器壺	東南アジア産か
80	2	2	軟質陶器壺	東南アジア産か
81	5－1	2	灰釉皿	産地不明
82	4－1	2	灰釉皿	産地不明
83	4－1	2	灰釉皿	産地不明
84	5	1・2	灰釉皿	産地不明
85	2	2	灰釉壺	産地不明
86		表土	陶器鉢	信楽系
87	4－1	2	すり鉢	備前系
88	1	3	すり鉢	備前系
89	1	2	すり鉢	備前系

第Ⅳ章　まとめ

水崎遺跡の歴史的背景

水崎遺跡からは，朝鮮王朝陶磁をはじめ，東南アジア産の陶磁器や，中国産陶磁器が出土しており，当時の広範な交易を知ることができる内容となっている。本遺跡については，1471年申叔舟による『海東諸国紀』から，遺跡周辺に「可吾沙只浦」・「阿吾頭羅可知浦」・「可里也徒浦」・「敏沙只浦」・「頭知洞浦」があり，それぞれ現在の郷崎・大連河内・仮宿・水崎・土寄に比定されている（田中1991）。これらは現在の尾崎地区であり，当時この地区は平茂続・中尾吾郎ら，早田氏の一族がいたことが知られる。表３の現在の尾崎地区の字図との対比では，南より４の土寄・９の大連河内・16の水崎・17の仮宿となり，「海東諸国紀」にはそれぞれ戸数，200余戸・100余戸・200余戸・200余戸とある。尾崎という狭小な地に，超過密な人口を抱えていたことになる。勿論この数字をそのまま信用することはは



第14図　尾崎地区字図

番号	字名	番号	字名	番号	字名	番号	字名	番号	字名
1	鉢ノ尻	8	前原	15	上田深	22	木ノ木庭	29	松ケ浦
2	横道	9	大連河内	16	水崎	23	三石庭	30	タナギ
3	緒ノ濱	10	モチ山	17	仮宿	24	長軒深	31	鳥ワミ
4	土寄	11	大連尻	18	カラン深	25	深石	32	榎壇
5	大石原	12	河岸川	19	島畑	26	五百松	33	寄木
6	砥石ノ本	13	ジュヅ越	20	大島	27	烏帽子	34	横木庭
7	刄ケ原	14	脇田	21	田ノ浦	28	水ケ浦	35	白壁

表３　尾崎地区字名

なはだ危険であるが，この地がそれほど繁栄していたことを表しているものと思われる。『海東諸国紀』の記述から15世紀後半にこの地を押さえていたことが知られる早田氏は，14世紀後半〜15世紀前半の頃には，島主宗氏をも凌ぐ勢力をもっていたとされる。水崎遺跡を含む尾崎地区は，1419年の応永の外寇のおりに，倭寇の拠点として最初に朝鮮軍の襲撃にあい，家や船が焼き尽くされたことも文献から知られており，本遺跡の3層中やピット内に炭化物や焼土が充塡していることは，このことと関連するものとも考えられる。応永の外寇以後も早田氏は浅茅湾を中心に勢力をもち，1426年には宗氏に続いて図書を受け，朝鮮半島との交易をいち早く再会している。本遺跡出土の数多くの朝鮮王朝陶磁は，この頃の早田氏の交易を表すものであろうことは想像に難くない。特に朝鮮王朝陶磁の出土が全体の7割にも達することは，早田氏が15世紀前半を中心に朝鮮半島と交易していたことを遺物からも実証できたことに大きな評価を与えることができよう。

早田氏と海外貿易

遺跡出土のベトナム・タイの陶磁器については，文献史的に田中健夫氏が1430年に早田六郎次郎が宗貞盛の使者として琉球に渡ったことや，1433年にも早田氏が朝鮮から琉球への使者になるなどの指摘から(田中1980)，朝鮮半島へ通交を求める琉球を介して東南アジアの文物を手に入れた可能性が指摘できる。壱岐の覩城跡の調査でも東南アジアの陶磁器が出土しているが，宮崎貴夫は覩城跡を志佐氏の壱岐における拠点的な城としたうえで，外山幹夫氏が文献史的に1421年（応永28）や1423年に南海産物を朝鮮王朝に献じたこと，志佐氏が三角貿易をおこなっていたとする指摘を引用し，覩城跡出土の東南アジアの陶磁器が，琉球との交易でもたらされ，志佐氏の交易がいかに広範であったかを示している。また，宮崎は外山氏が15世紀前葉に盛んであった東南アジアとの交易が15世紀後葉以降には衰退することについての指摘や，高良倉吉氏による博多商人の進出が在地土豪の東南アジア進出に歯止めをかけたとすることなどの説を引用して覩城跡の出土遺物を検討している(宮崎1998)。このように早田氏や志佐氏の琉球との接触は15世紀の初頭であることは文献資料からも知ることができるが，この時期は早田氏の朝鮮半島交易が一番盛んな時期であり，この時期の琉球との接触は，早田氏の海上航海圏の広さを示す事柄である。ただし早田氏の対朝鮮交易も1438年に宗氏が文引制度を確立した後に極端に減少している。この文引制度は，朝鮮半島と交易する者は宗氏の許可証が必要となる取り決めであり，田中氏の分析からも1438年以降，早田氏の対朝鮮交易が極端に減少することが指摘されている。このことから，早田氏の対外交易は1420年代以降，1438年に至る時期をピークとしており，早田氏に関する貿易陶磁の流入はこの時期にピークをもつことが推察される。また，先の壱岐の覩城跡出土の東南アジア産陶磁器も，本遺跡出土の東南アジア産陶磁も15世紀前半の資料として捉えることができよう。早田氏については，応永の外寇以後も朝鮮半島との交易を盛んにおこなっていることは先に述べたが，早田氏以外の在地土豪が琉球と接触する必然性として，応永の外寇が大きな契機となった可能性が指摘できよう。応永の外寇により朝鮮半島情勢は緊張関係が存続し，この間あるいはこの後，九州各地の在地勢力は朝鮮半島との交易が極端に縮小され，琉球貿易に以外に活路を見いだせなかった結果として琉球との接触を選んだのであろう。1438年に確立した文引制度は，早田氏にお

いてもその後の対外交渉において大きな打撃であったであろうことは言うまでもない。

本遺跡出土の東南アジアの陶磁器の編年的位置については，文献上での琉球との接触が1420～1430年代にあることや，本遺跡出土の青磁のほとんどが山本分類の青磁碗Ⅳ類であること，森田分類白磁D類の出土などからも15世紀前葉にあることはほぼ間違いないものと思われる。14世紀前半～15世紀前半段階の中国陶磁器については，宮崎によれば肥前西部地区ではこの時期に減少するとし，その原因として元末から明初における海禁政策や，幕府による統制貿易の結果としている。対馬でも，応永の外寇以後の対朝鮮半島情勢や，明の海禁政策等を考慮すれば，本遺跡出土の青磁Ⅳ類などの中国製品についても琉球経由で流入した可能性があることを指摘しておきたい。

陶磁器破片数量からみた水崎遺跡

表４は破片数量からみた本遺跡の陶磁器の組成である。表作成にあたり，朝鮮王朝陶磁の堅手白磁等の16世紀～17世紀初頭と思われる物や，中国青磁・白磁の古いものについては省いている。したがって，ほぼ14世紀後半～15世紀前半代，特に15世紀前半代の本遺跡の組成を示すものと判断して頂きたい。ただし，今回の調査が，範囲確認調査と併せて約52m²と狭小な範囲であることから，遺跡の性格全体を表しているかについては，疑問の余地を残していることは否めない。

表４は本調査，一次調査，本調査と一次調査の合計，と本調査で包含層の状況が良好であった２区の３・４層の陶磁器について破片数定量分析をおこなったものである。表４－①から４つのグラフがほぼ均一であることが看取でき，特に輸入陶磁器と国産との比率においては同様な結果が得られている。輸入陶磁器は，表４－①の合計でみると全体の97％にのぼり，本遺跡が圧倒的に輸入陶磁器にたよっていたことが理解できる。輸入陶磁器の中でも朝鮮王朝陶磁が全体の70％を占めることは，他の肥前地域の陶磁器組成ではありえない存在である。表４－②～⑤は輸入陶磁器の中でさらに細分したものである。表４－⑤から判断すると，中国陶磁器の中でも青磁が過半数を占め，龍泉窯系青磁でほぼ占められる。また，白磁についてもほぼ森田分類の白磁皿D類で占められる。朝鮮王朝陶磁では粉青沙器と無釉陶器に大別したが，粉青沙器については，さらに細分する必要性があるものと思われる。ここでは印花文・象嵌・刷毛目等を一括して取り扱った。また，無釉陶器についても調整の在り方や，表面に光沢のある雑釉が掛かったもの等も含めており，粉青沙器同様に今後の細分が必要と思われる。粉青沙器の多くは杯・碗・皿の供膳具を主体に，花器と思われる瓶等が出土している。無釉陶器については，甕が主体であることから表４－⑤に見られる50％という数字をそのまま信用するならば，本遺跡では貯蔵具の割合が高いことが指摘できる。東南アジア産の陶磁器については全体の５％，39点の出土があり，調査面積に対する割合から換算すると，他遺跡の割合より突出していると考えられる。

国産陶器は，備前の擂鉢・信楽等が出土しているが，土師器が１点も出土していないことは特筆に値する。以上のことから陶磁器組成からみた水崎遺跡の特徴を列記する。

1　輸入陶磁器が主体を占め，その中でも朝鮮王朝陶磁の占める割合が多い。

2　全体に占める東南アジア産陶磁の出土比率が他の遺跡に比べ高い。

3　土師器の出土が皆無である。

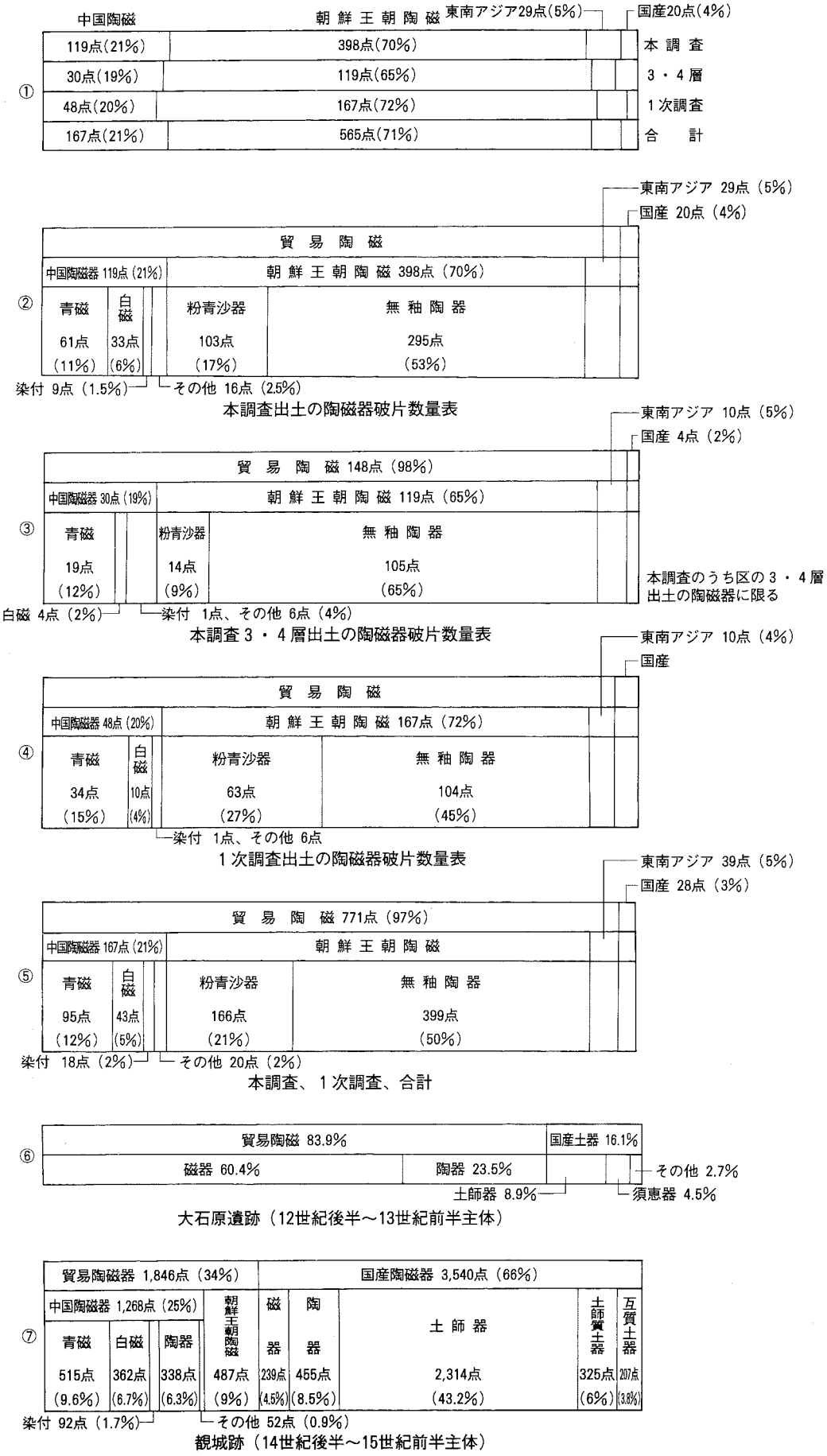

中国陶磁
朝鮮王朝陶磁
東南アジア29点(5%)
国産20点(4%)
①
119点(21%)
398点(70%)
本調査
30点(19%)
119点(65%)
3・4層
48点(20%)
167点(72%)
1次調査
167点(21%)
565点(71%)
合計
東南アジア 29点 (5%)
国産 20点 (4%)
②
貿易陶磁
中国陶磁器 119点 (21%)
朝鮮王朝陶磁 398点 (70%)
青磁
61点
(11%)
白磁
33点
(6%)
粉青沙器
103点
(17%)
無釉陶器
295点
(53%)
染付 9点 (1.5%)
その他 16点 (2.5%)
本調査出土の陶磁器破片数量表
東南アジア 10点 (5%)
国産 4点 (2%)
③
貿易陶磁 148点 (98%)
中国陶磁器 30点 (19%)
朝鮮王朝陶磁 119点 (65%)
青磁
19点
(12%)
粉青沙器
14点
(9%)
無釉陶器
105点
(65%)
本調査のうち区の3・4層出土の陶磁器に限る
白磁 4点 (2%)
染付 1点、その他 6点 (4%)
本調査3・4層出土の陶磁器破片数量表
東南アジア 10点 (4%)
国産
④
貿易陶磁
中国陶磁器 48点 (20%)
朝鮮王朝陶磁 167点 (72%)
青磁
34点
(15%)
白磁
10点
(4%)
粉青沙器
63点
(27%)
無釉陶器
104点
(45%)
染付 1点、その他 6点
1次調査出土の陶磁器破片数量表
東南アジア 39点 (5%)
国産 28点 (3%)
⑤
貿易陶磁 771点 (97%)
中国陶磁器 167点 (21%)
朝鮮王朝陶磁
青磁
95点
(12%)
白磁
43点
(5%)
粉青沙器
166点
(21%)
無釉陶器
399点
(50%)
染付 18点 (2%)
その他 20点 (2%)
本調査、1次調査、合計
⑥
貿易陶磁 83.9%
国産土器 16.1%
磁器 60.4%
陶器 23.5%
その他 2.7%
土師器 8.9%
須恵器 4.5%
大石原遺跡 (12世紀後半～13世紀前半主体)
⑦
貿易陶磁器 1,846点 (34%)
国産陶磁器 3,540点 (66%)
中国陶磁器 1,268点 (25%)
青磁
515点
(9.6%)
白磁
362点
(6.7%)
陶器
338点
(6.3%)
朝鮮王朝陶磁
487点
(9%)
磁器
239点
(4.5%)
陶器
455点
(8.5%)
土師器
2,314点
(43.2%)
土師質土器
325点
(6%)
瓦質土器
207点
(3.8%)
染付 92点 (1.7%)
その他 52点 (0.9%)
観城跡 (14世紀後半～15世紀前半主体)

表4　破片数定量分析表

4　国産の陶器は出土割合が極端に少ないが，その中でも備前の擂鉢や在地系の擂鉢など擂鉢が主体を占める。

この特徴は，水崎遺跡がいかに朝鮮半島と密接な関係にあったかを示すとともに，東南アジア産の陶磁器の出土は，先の早田氏の琉球との関わりを考慮すれば納得できる内容である。また，土師器の出土が全くないことについては，遺跡の性格を考える上で重要な意味をもつものと考える。時期はやや下るが，国産陶器のうち備前の擂鉢の出土は，陶磁器が貿易陶磁にたよっていた反面，食文化そのものは，日本的文化の上に成り立っていた可能性が示唆される。

水崎遺跡の性格について

先の組成表を周辺の中世遺跡との間で比較検討してみる。対馬で中世陶磁器の組成表を提示したものとして大石原遺跡がある(古門1996)。大石原遺跡は12世紀後半～13世紀前半を主体とする遺跡であるが，古門雅高は報文のまとめの項で，貿易陶磁80%，国産20%の割合であるとし，貿易陶磁中，中国産磁器が朝鮮産磁器の２倍であるとしている。本遺跡では貿易陶磁で言えば，粉青沙器21%，中国産磁器19%で中国産と朝鮮産の比率はほぼ同一の値を示している。また，全体の中での貿易陶器の割合は大石原遺跡では，23.5%であるが水崎遺跡では50%と，朝鮮産無釉陶器の比率が大石原遺跡よりも高いことが指摘できよう。12～13世紀の肥前の中世遺跡全体について言えることであるが，中国陶磁器の流入が非常に多いことが指摘されており，大石原遺跡でもこのことを反映し中国産磁器の出土量が多いものと思われる。また，水崎遺跡と同じ14世紀後半～15世紀前半に位置付けられる壱岐の覩城跡では，輸入陶磁器が全体の34%，国産陶磁器が66%を示し，同じ時期でありながら水崎遺跡とは大きな差が見られる。特に土師質土器の出土において，相違をみせるのは覩城跡が城館であることや，志佐氏の代官が居住していたことを考えれば，本土側の饗宴形態をそのまま受け継いだ結果であろうことが予想される。一方，水崎遺跡は在地の海商早田氏との関係が深い遺跡であることは何回か述べた。いわば在地土豪であり，村井章介の言うところのマージナルマン（村井1993）の生活形態をもっていた可能性もあり，日本の中世的饗宴形態を持たない生活形態を考える必要もあろう。早田氏という海商が，幕府や，その他の諸豪族の影響を受けていなかったことを示すことではないだろうか。このことについては，宗氏が小弐氏と関わりをもつことや，室町幕府の機構の中に組み込まれていた姿とはまた違った在り方を陶磁器においても反映しているものと考えるからである。このことに関しては宗氏の居館跡等の調査から今後比較検討する必要がある。もう一つの捉え方として，倉庫的なものが想定される。このことについては，東南アジア産の陶磁器の出土や，煮炊具の出土が少ないこと，貯蔵具が多いことなど貿易品を格納する倉庫と考えることもできる内容からの推測である。また，字図から見れば，調査区が仮宿という地名で『海東諸国紀』にも登場する地名であり，この字名からも本来の居住区域から遊離した地区であったことが想定される。

おわりに

今回，朝鮮王朝陶磁を分類するにあたり，筆者自身に混乱があり本報告中でも象嵌青磁と粉青沙器の用語が不明確な部分が多かった。朝鮮王朝陶磁の編年や分類については，その出土自体が少ないこ

による)。田中は、15世紀を中心とする朝鮮と琉球の通交を4期に分けている。早田六郎次郎の琉球渡航は、このうち第2期に位置づけられている。第2期とは対馬・九州人による通交中継時代とされ、世宗11（1429）年から端宗末（1468）年頃までとされる（田中1980)。

5　これ以降、嘉吉条約を経て宗氏が朝鮮との通交を独占していく(田中1980)。早田氏は、宗氏の被官化と廻船商人への転化を余儀なくされる。しかし本遺跡に近い土寄は、この時期になっても拠点的な機能を保っていたようである。六郎次郎の子茂続のいた土寄には、「つちより（土寄）三ヶ村よりかうらい（高麗）・六ち（地）へはたらき候ふね（船)」(『日下部文書』より佐伯弘次引用）があり、土寄は朝鮮と九州を結ぶ流通の拠点となっていたと考えられている（佐伯1992)。

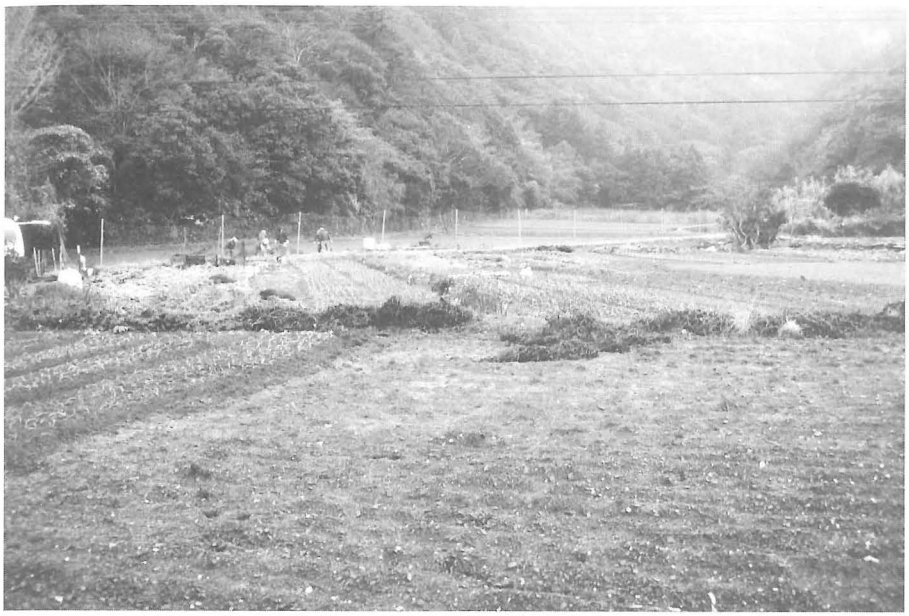
6　対馬島の条に「中枢平茂続　対馬島頭知洞浦二百余戸　賊首早田子會来侍朝為中枢今還本島」とある(『海東諸国紀』日本国紀)。

【引用・参考文献】

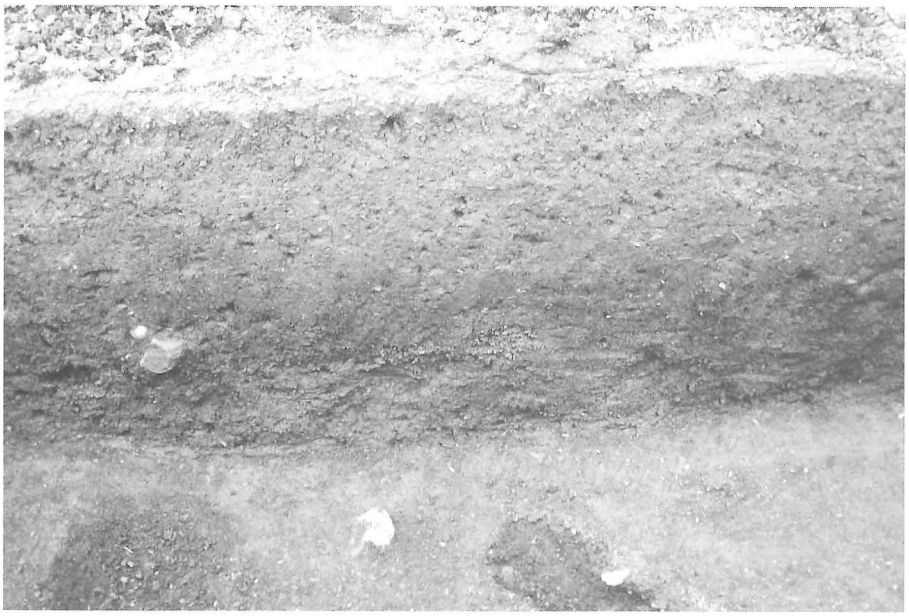
長節子1987『中世日朝関係と対馬』吉川弘文館
佐伯弘次1990「国境の中世交渉史」『玄界灘の島々』小学館
佐伯弘次1992「海賊論」『アジアの中の日本史　III海上の道』東京大学出版会
田中健夫1980「対馬における宗氏の発展」『長崎県史　古代・中世編』吉川弘文館
田中健夫1991訳註　申叔舟『海東諸国紀』岩波書店
(補足）時間的制約で未見の関連文献として以下のものがある。
田中健夫1987「倭寇と東アジアの通交圏」『日本の社会史１』岩波書店
田村洋幸1967『中世日朝貿易の研究』三和書房
中村栄孝1965・1964『日朝関係史の研究』上・中・下　吉川弘文館

(川口)

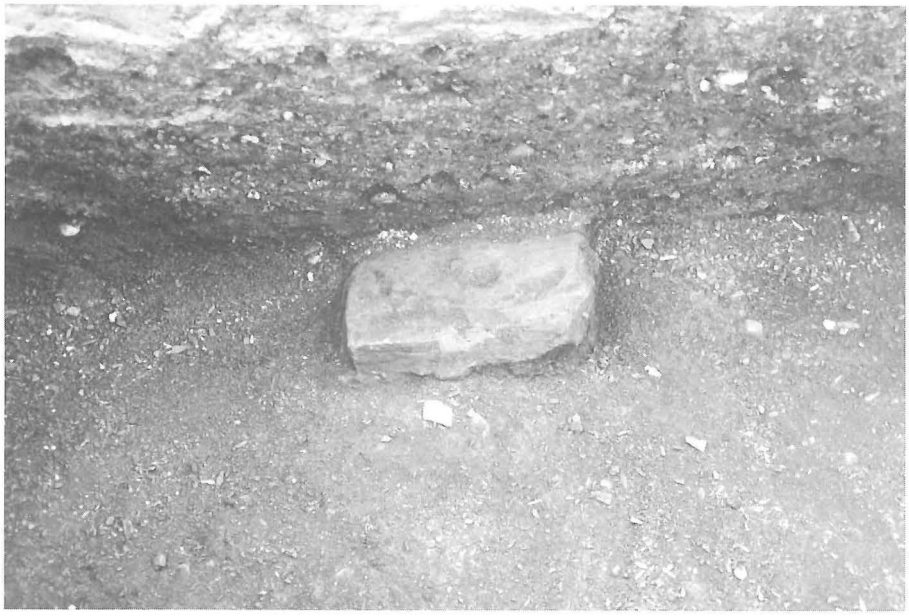
図　　版



遺跡遠景



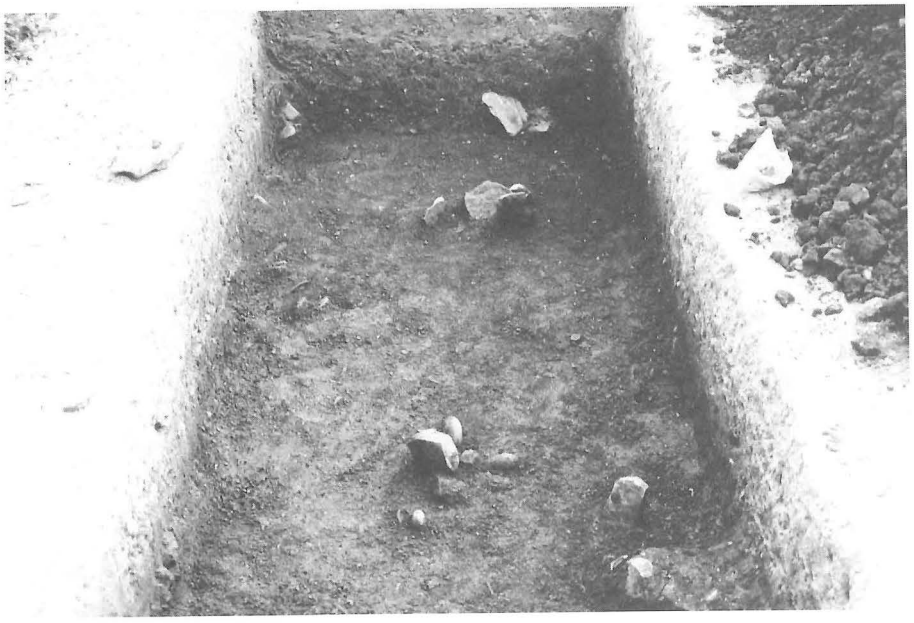
II区　東壁



I区　3 層上面確認の礎石

図 1　遺跡遠景及び土層

II区　3層内，確認のピット
北側より撮影

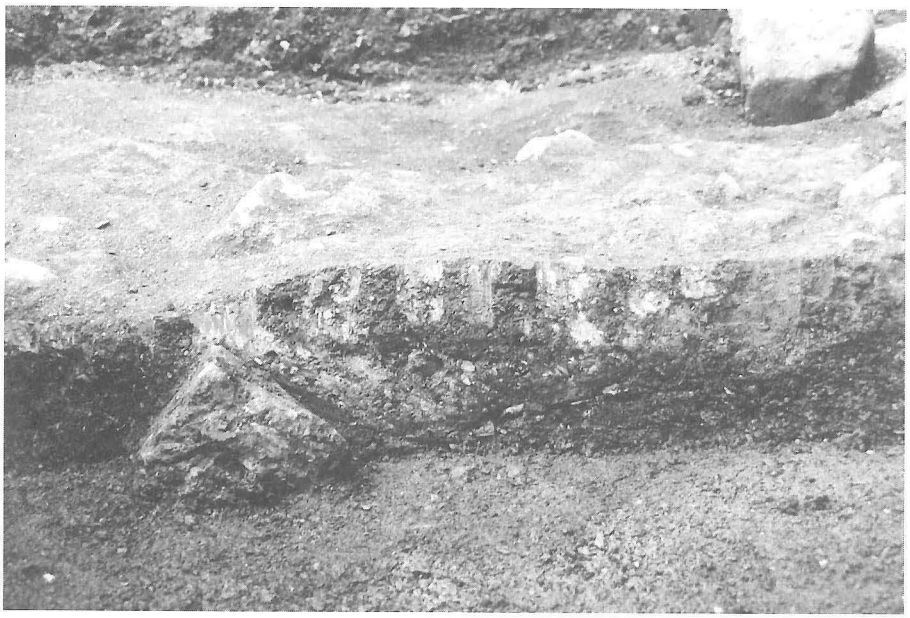


II区

III区　確認のピット列
北側より撮影

図2　II・III区ピット検出状況

II区　3層上面で確認の焼土



II区　焼土の断面

II区　ピット内出土の
無釉陶器と銭貨

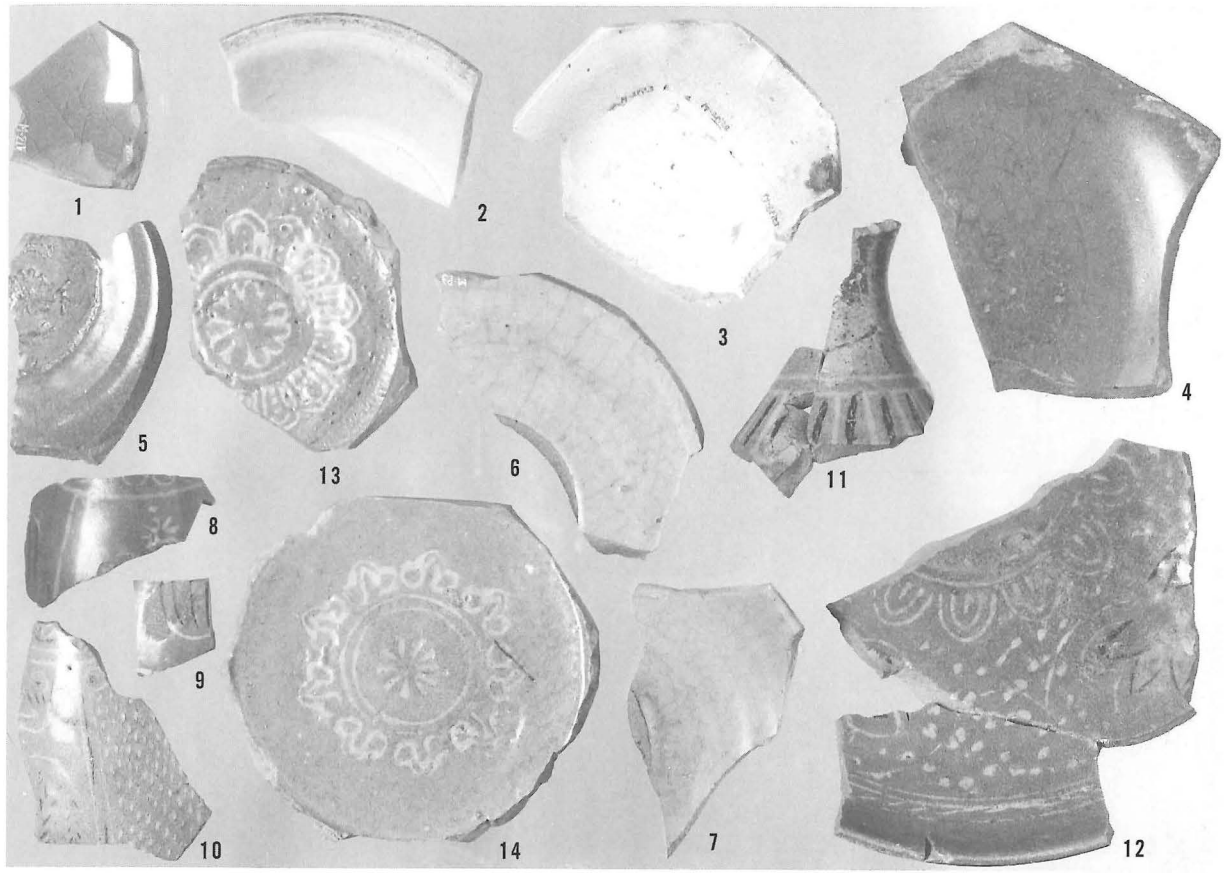
図3　焼土検出状況

II区　ピット内出土の白磁D類

II区　東壁

III区　ピット内の礎石

図4　白磁D類出土状況



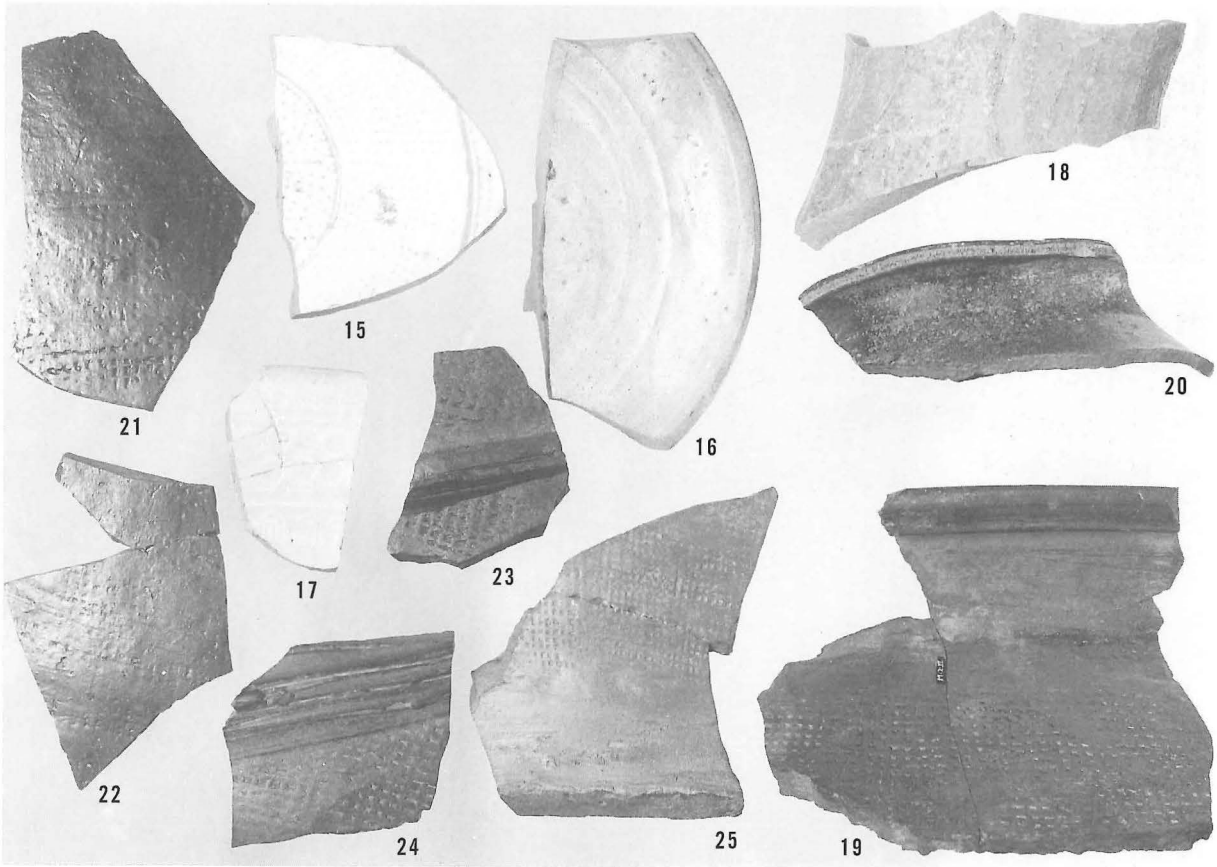
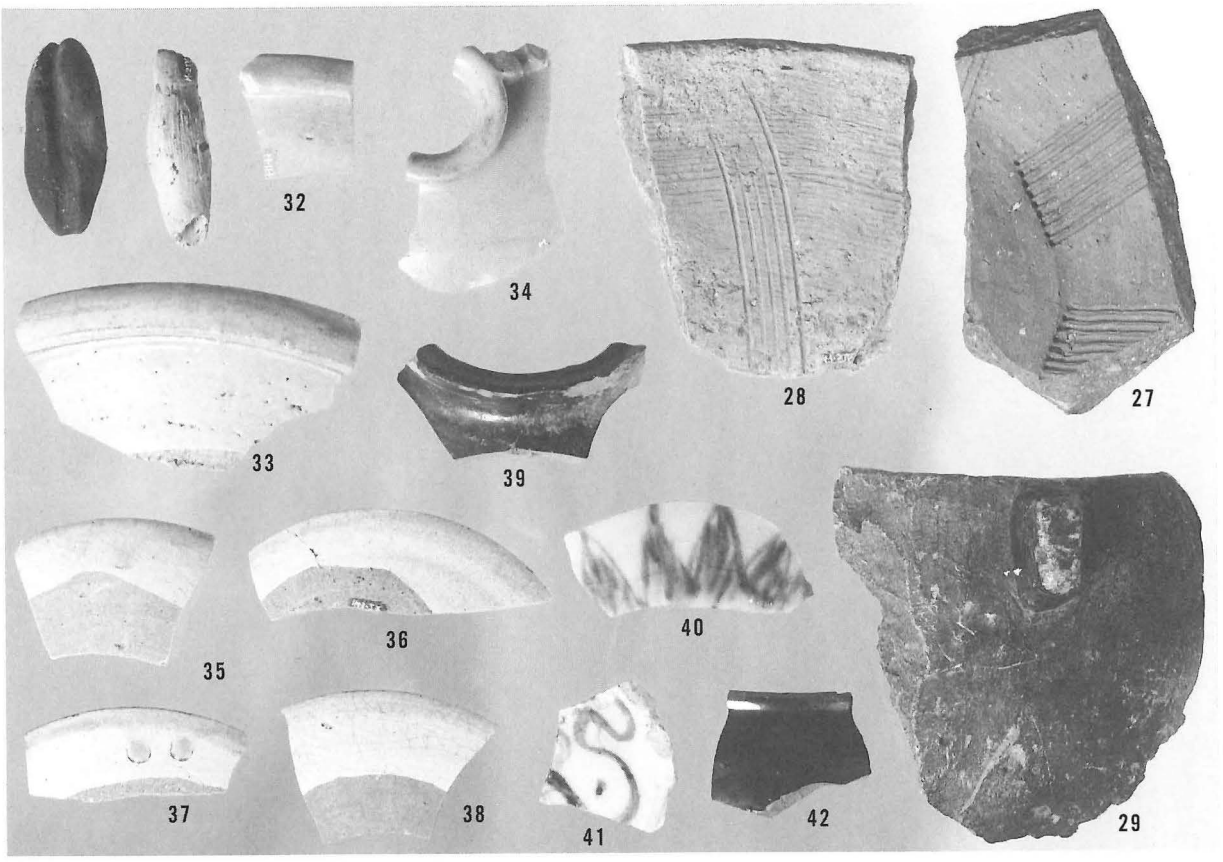


図 5　朝鮮王朝陶磁
（番号は実測図に対応する）



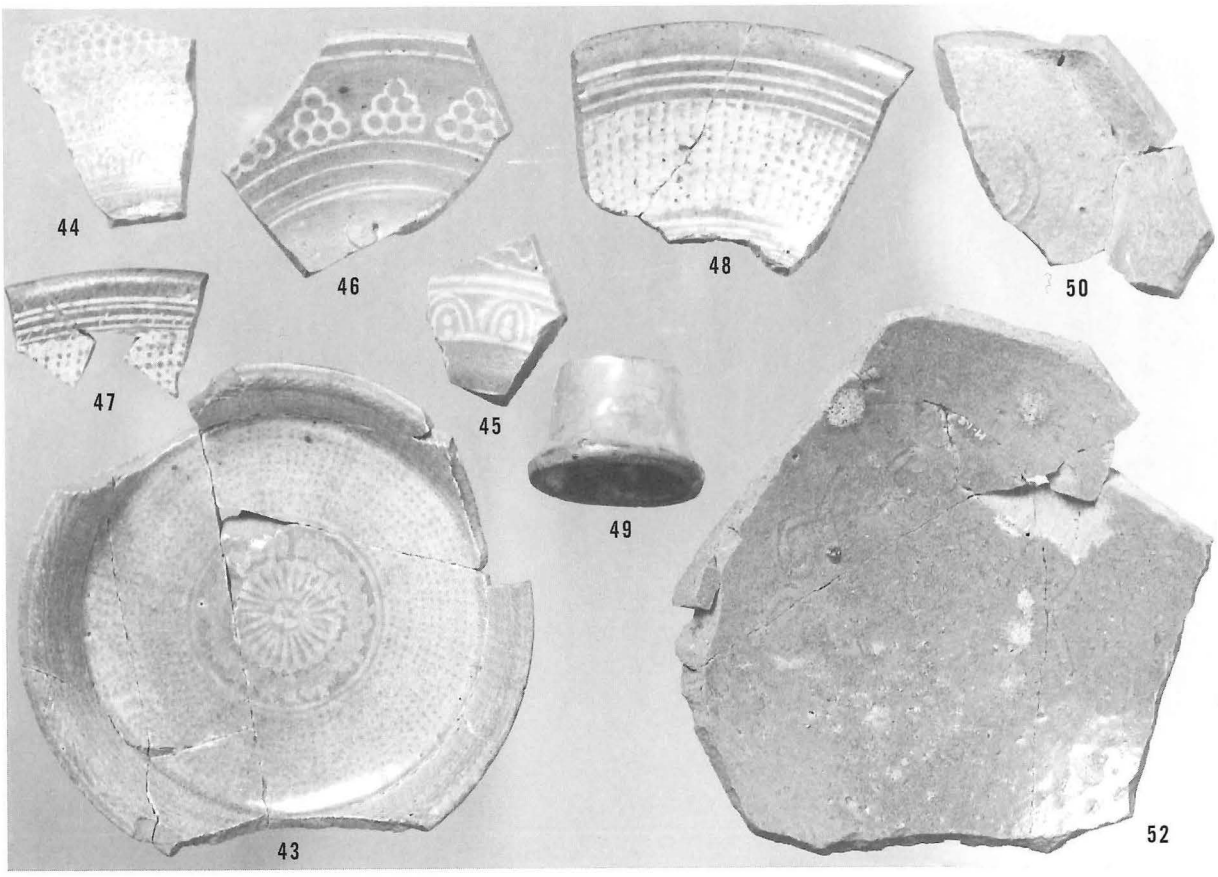
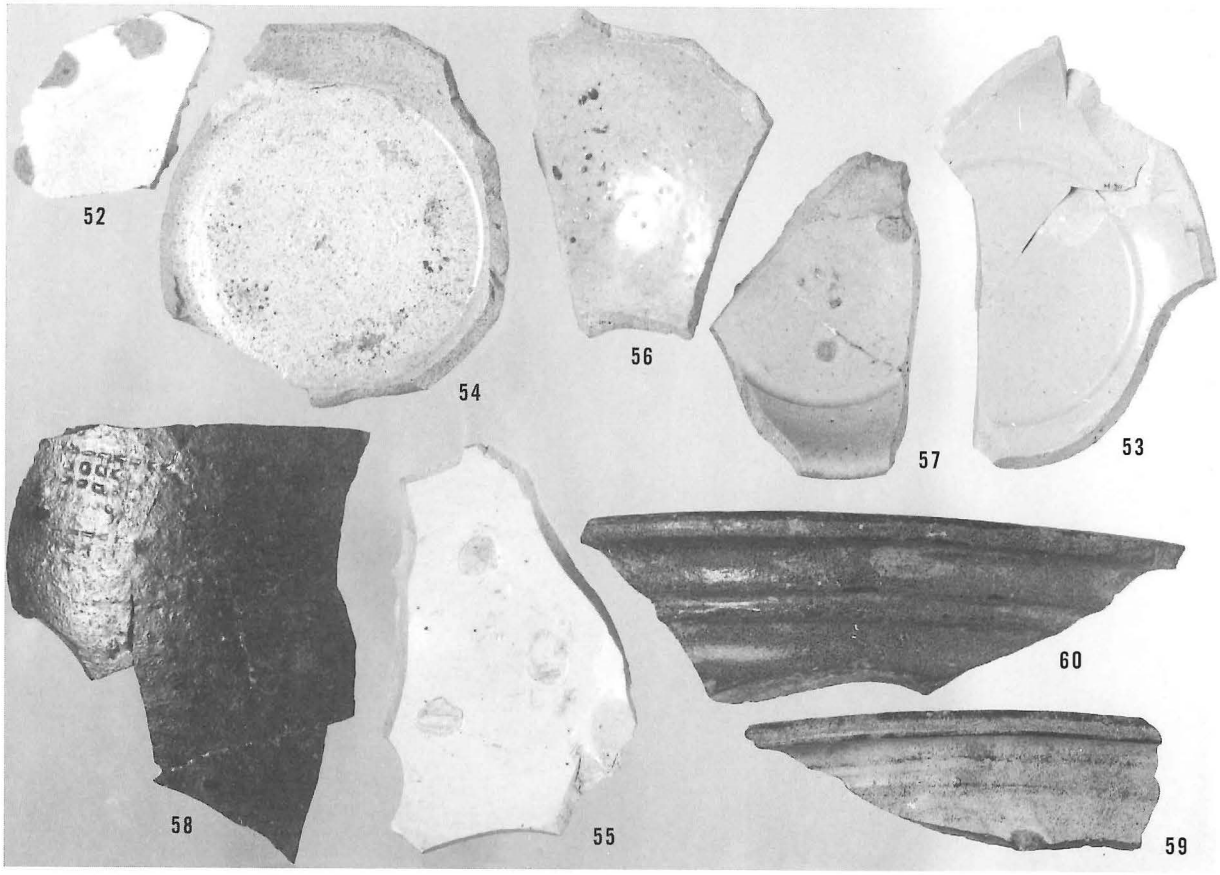


図 6　中国産磁器・朝鮮王朝陶磁



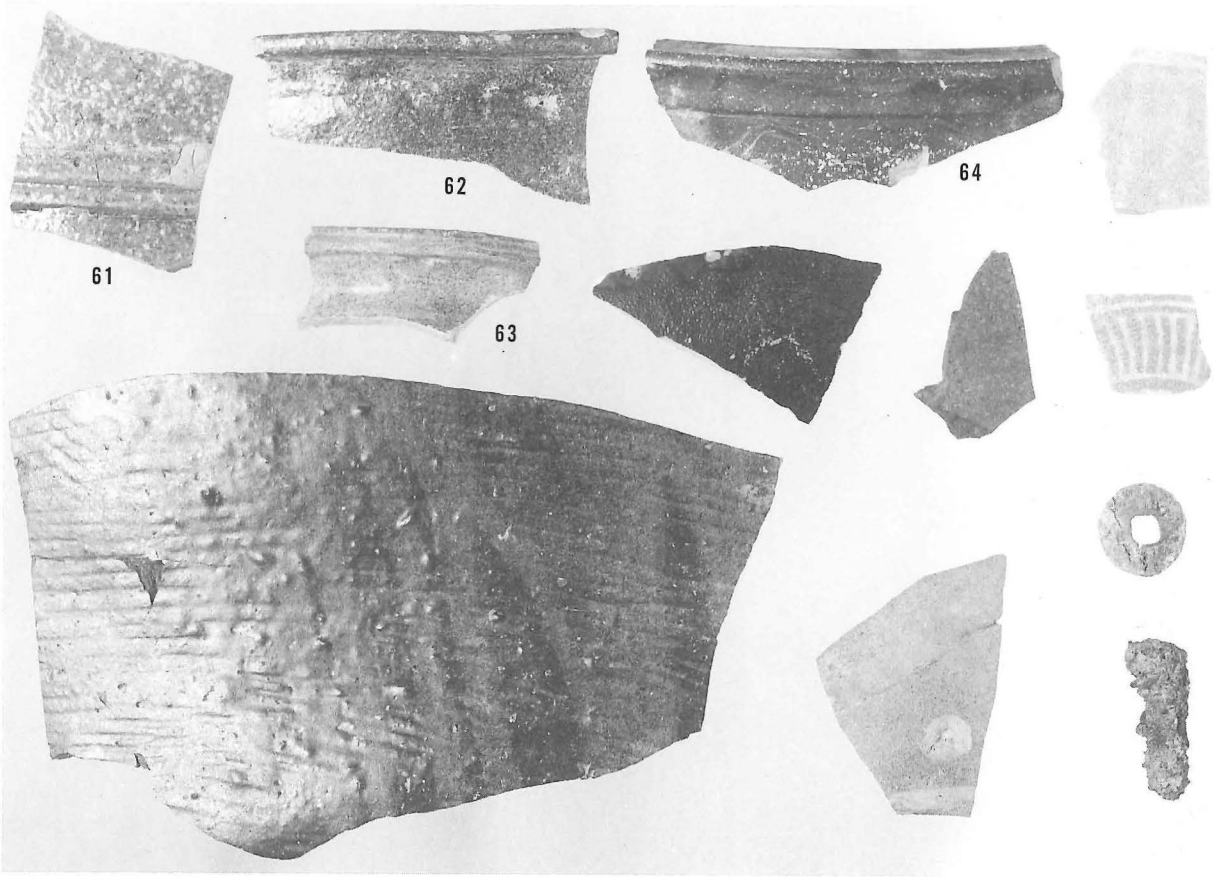


図 7　朝鮮王朝陶磁・他

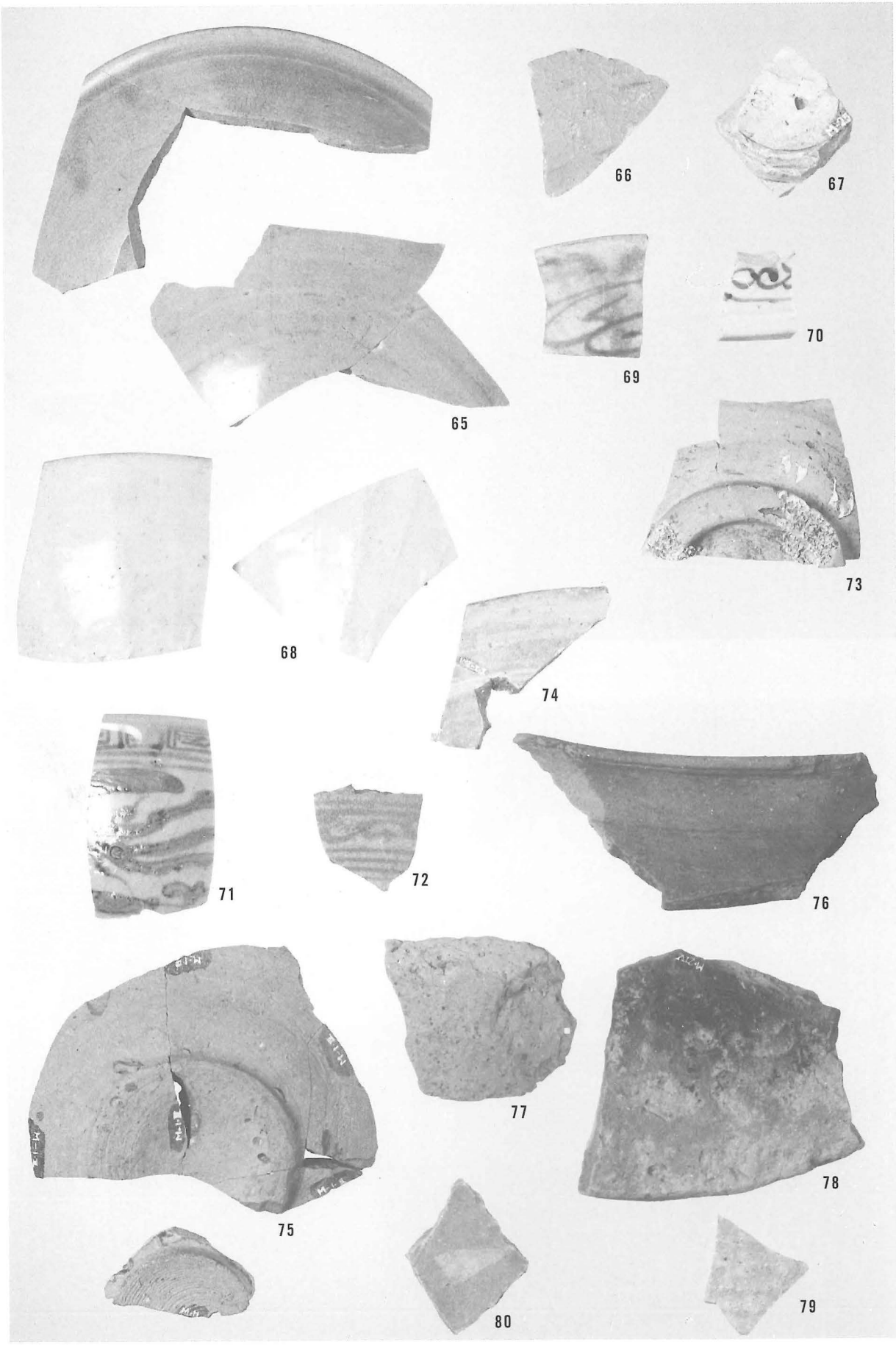


図 8　東南アジア産の遺物・外面（2/3）

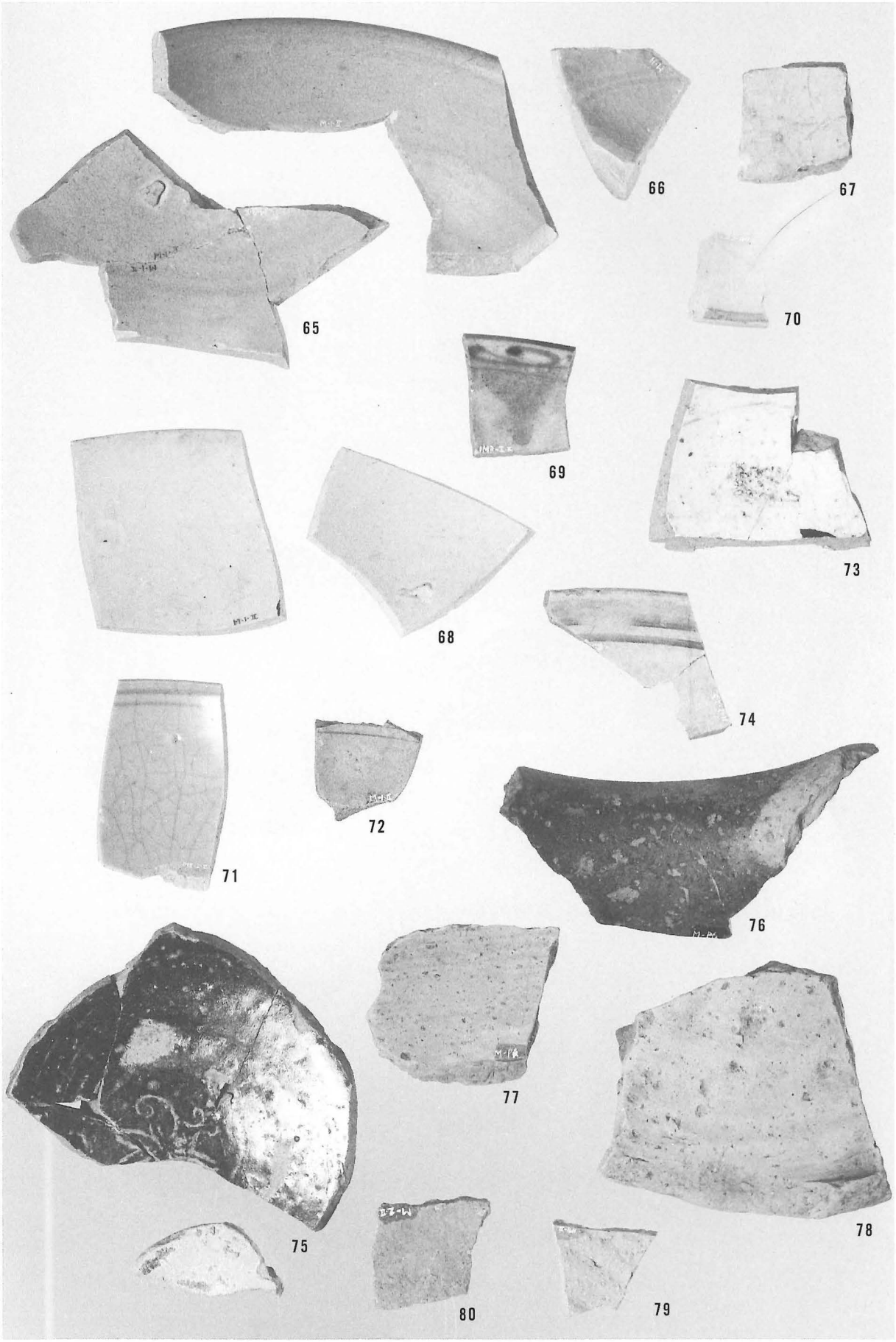


図 9　東南アジア産の遺物・内面（2/3）

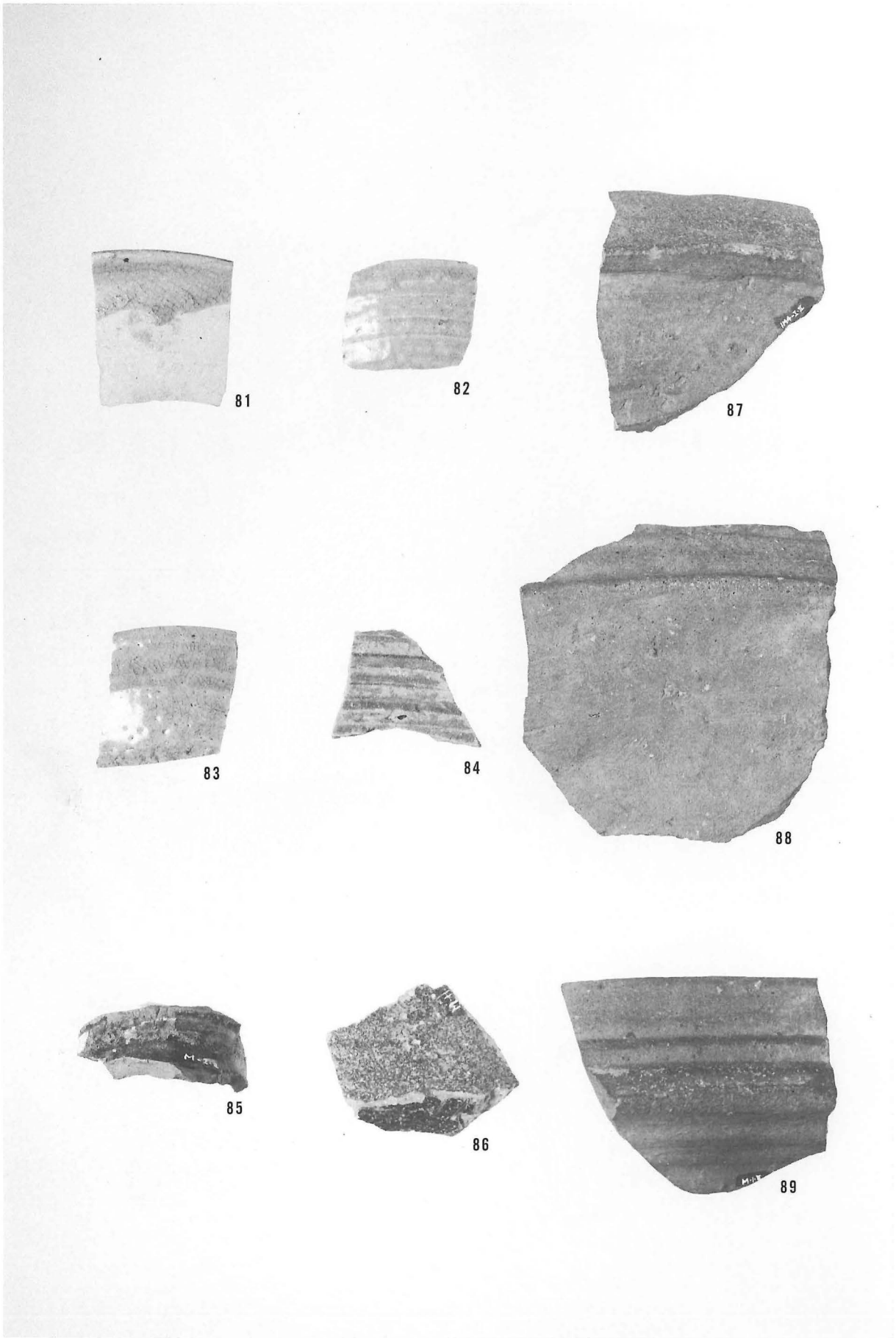


図10　国産の遺物・外面（2/3）

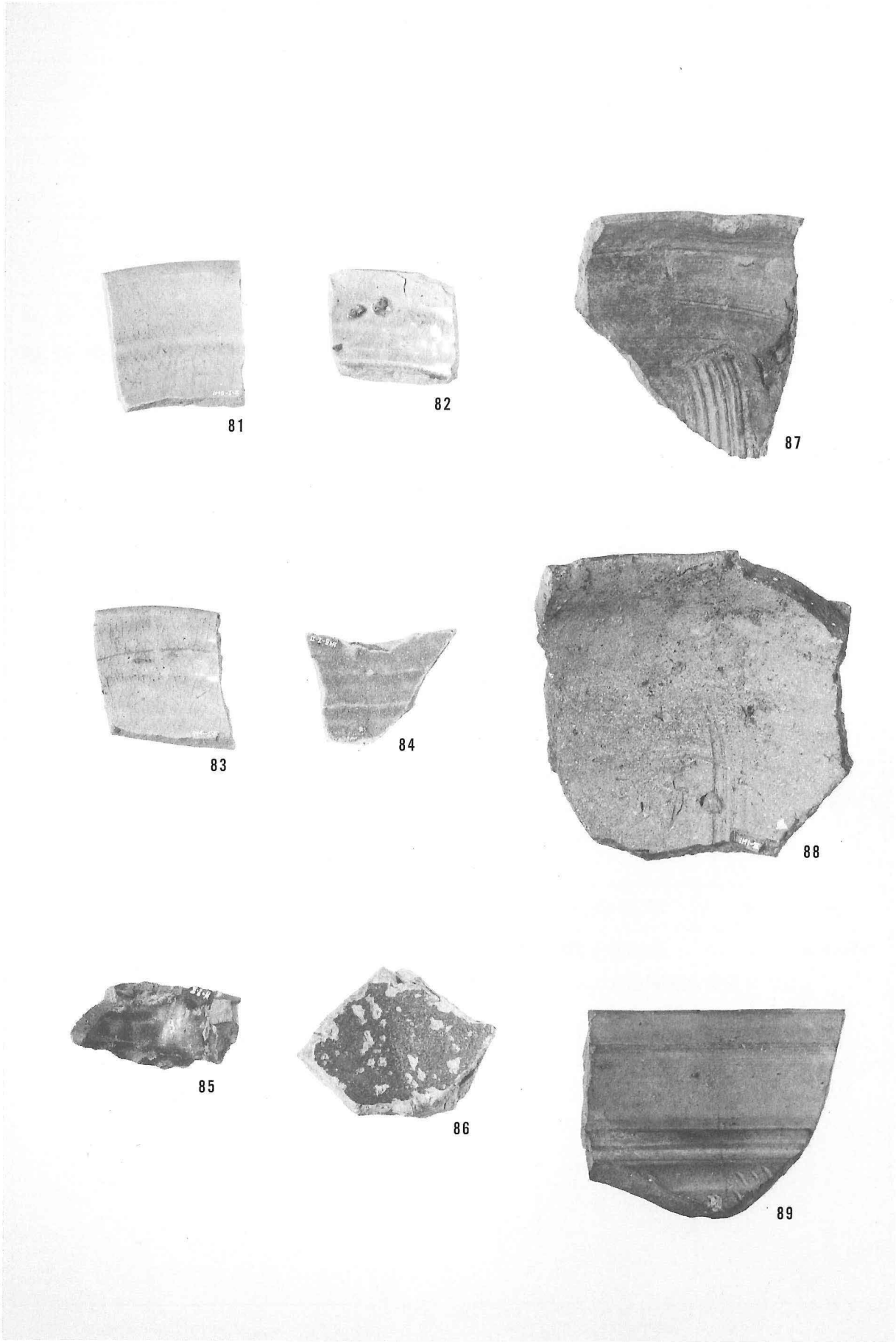


図11　国産の遺物・内面（2/3）

報告書抄録

フリガナ	ミズサキイセキ
書名	水崎遺跡
副書名	
巻次	
シリーズ名	美津島町教育委員会調査報告書
シリーズ番号	第8集
編著者名	田中淳也　福田一志　川口洋平
編集機関	美津島町教育委員会
所在地	長崎県上県郡美津島町
発行年月日	西暦1999年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
水崎遺跡	長崎県上県郡 美津島町大字 字仮宿	442	001	34° 18′ 46″	129° 13′ 47″	19970310 ～ 19970314 (範囲確認) 19981110 ～ 19981114 (本調査)	20m² 32m²	林道拡幅

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
水崎遺跡	集落	中世	掘立柱建物	朝鮮王朝陶磁 ベトナム産陶磁器	ベトナム産陶磁器が多量に出土

美津島町教育委員会調査報告書第８集

水　崎　遺　跡

平成11年３月31日

発 行　美津島町教育委員会
上県郡美津島町

印 刷　㈱ 昭 和 堂 印 刷